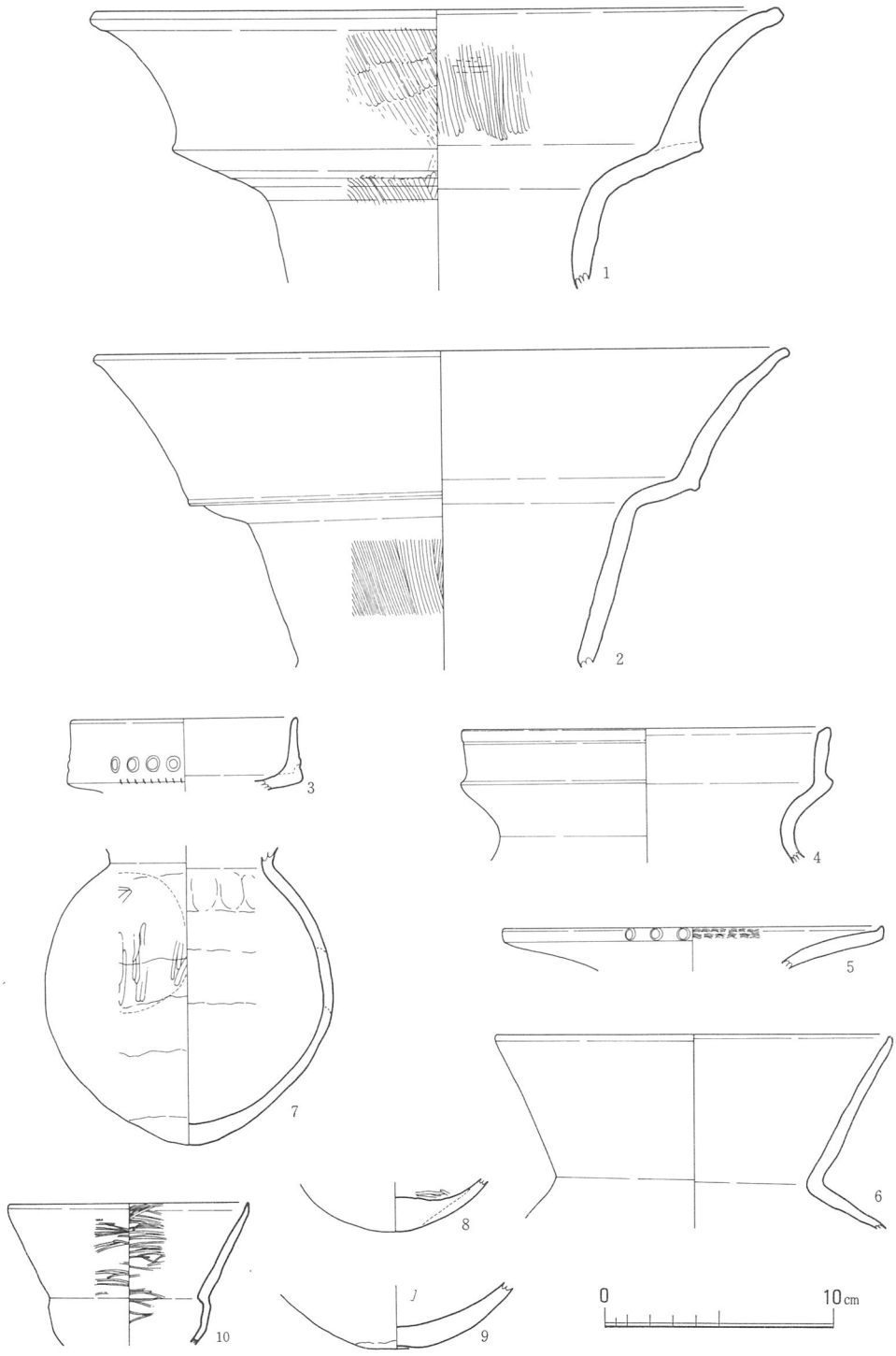
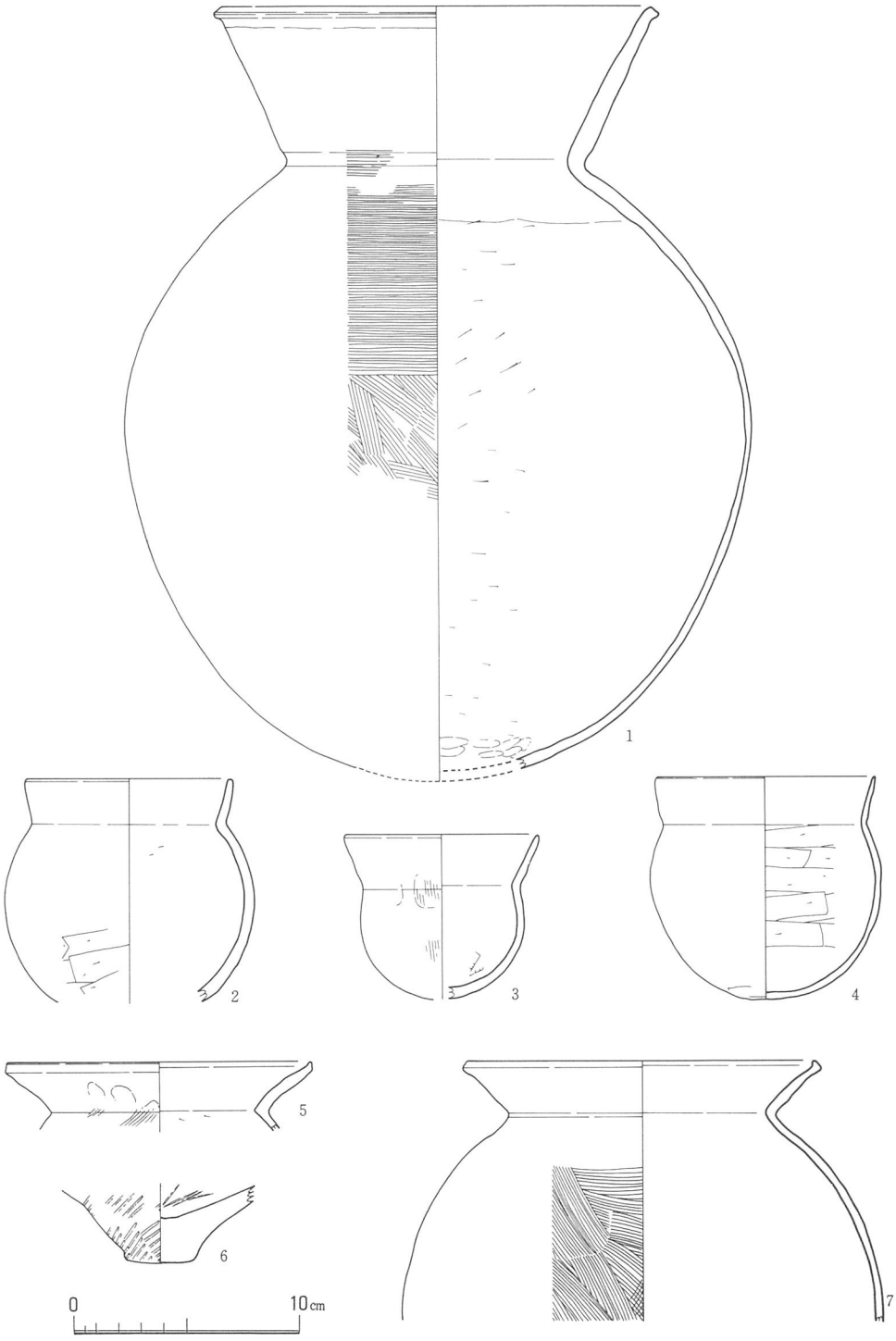
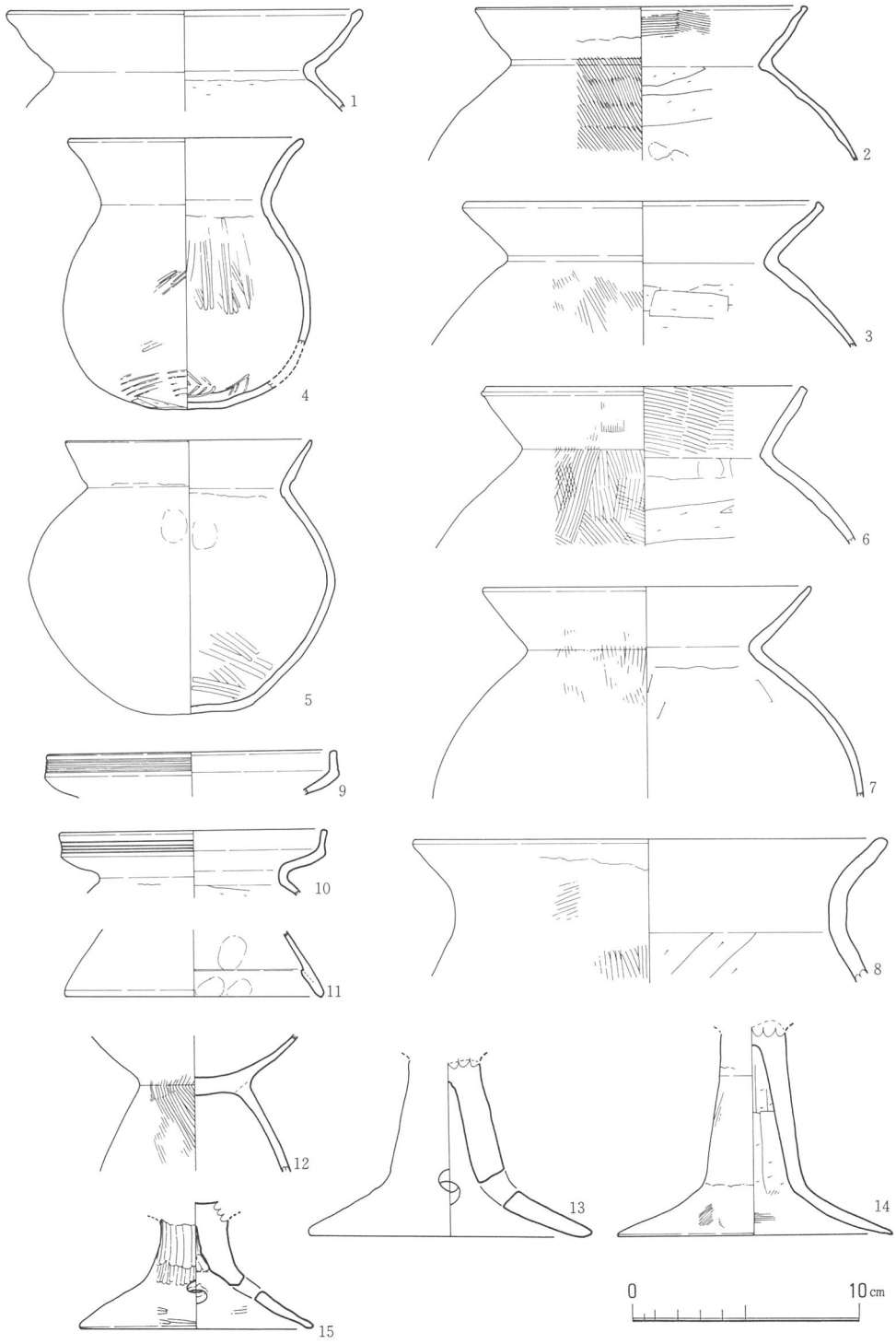


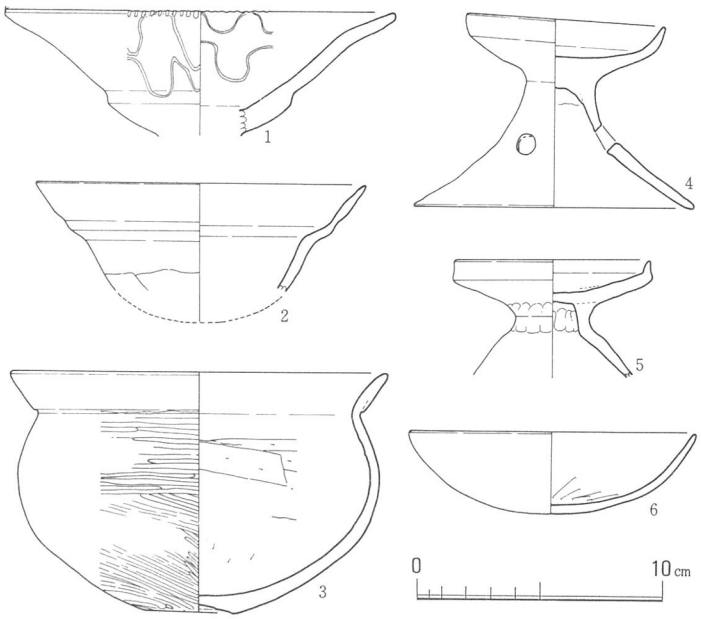

第45図　III区　91－ＯＲ肩部出土遺物実測図




第46図　III区　91－ＯＲ肩部出土遺物実測図




第47図　Ⅲ区　91－ＯＲ肩部出土遺物実測図




第48図　III区　91－ＯＲ肩部出土遺物実測図

甕は90点程度出土している。88－ＯＲの所で３つに分類したがここではさらに４つを追加する。

甕Ｉは第46図(６)をはじめ底部が25点出土している。

甕IIは第46図(５)だけが出土している。オリーブ黒色。

甕IIIは約45点中４点を図示した(第46図７・第47図１～３)。

Ⅳ：くの字状に外反する口縁部で端部は肥厚しないもの。頸部は鋭く屈曲する。外面にはハケ、内面にはケズリが施される。

約25点が出土している。第47図(６・７)に図示した。

Ⅴ：くの字状に外反する口縁部で端部は丸く終る。頸部の屈曲は鈍い。

第47図(８)は復元口径21.1cmである。頸部は一旦直立した後口縁部は外反する。体部外面はタテハケ、内面はケズリ、口縁部内外面はヨコナデである。この類は１点だけである。

Ⅵ：櫛描き文の施された短く直立する口縁部を持つもの。

４点が出土し、２点を図示した(第47図９・10)。いずれも外面には煤が付着している。

Ⅶ：脚台　３点あり、２点図示した(第47図11・12)。Ｓ字の口縁部は確認していない。

高坏は約30点出土しているが全体の形状の分かるものはない。

高坏Ｉｄは小破片であり、内外面にヘラ描きの粗い波状文がつく(第48図１)。高坏IIｂは12点あり第47図(13～15)を図示した。(13・14)は中空で、(15)は中実の低い脚柱部である。

鉢は６点出土した。第48図(３)はくの字状に外反する口縁部に、扁平な体部で底は凹んでいる。口縁部は折り返して作られる。調査全体で１点しか確認していない。(２)はいわゆる二段屈曲鉢で、他に４点出土している。

器台　第48図(４)はにぶい橙色の精良な胎土をした小破片である。今回の調査では一例

のみである。碗(44)もこの一例だけしか確認していない。

これらの土器群も良好な状態で出土したわけではないが、現在のところ88－ＯＲとほぼ同じ布留式の古い段階の時期にあたると考えている。中にはこれより古い様相や、新しい様相をもつものも含まれているが、これらの土器群の評価は現在の和泉地方の資料では十分行えない。今後の調査を待ちたい。

（禰宜田）

**製塩土器**(第49図)　約390個体の脚台部が出土している。この数は本遺跡出土製塩土器総数約480個体の８割に達している。91－ＯＲ内で出土する製塩土器の多くがこの土器溜りに由来すると考えてよいかも知れない。

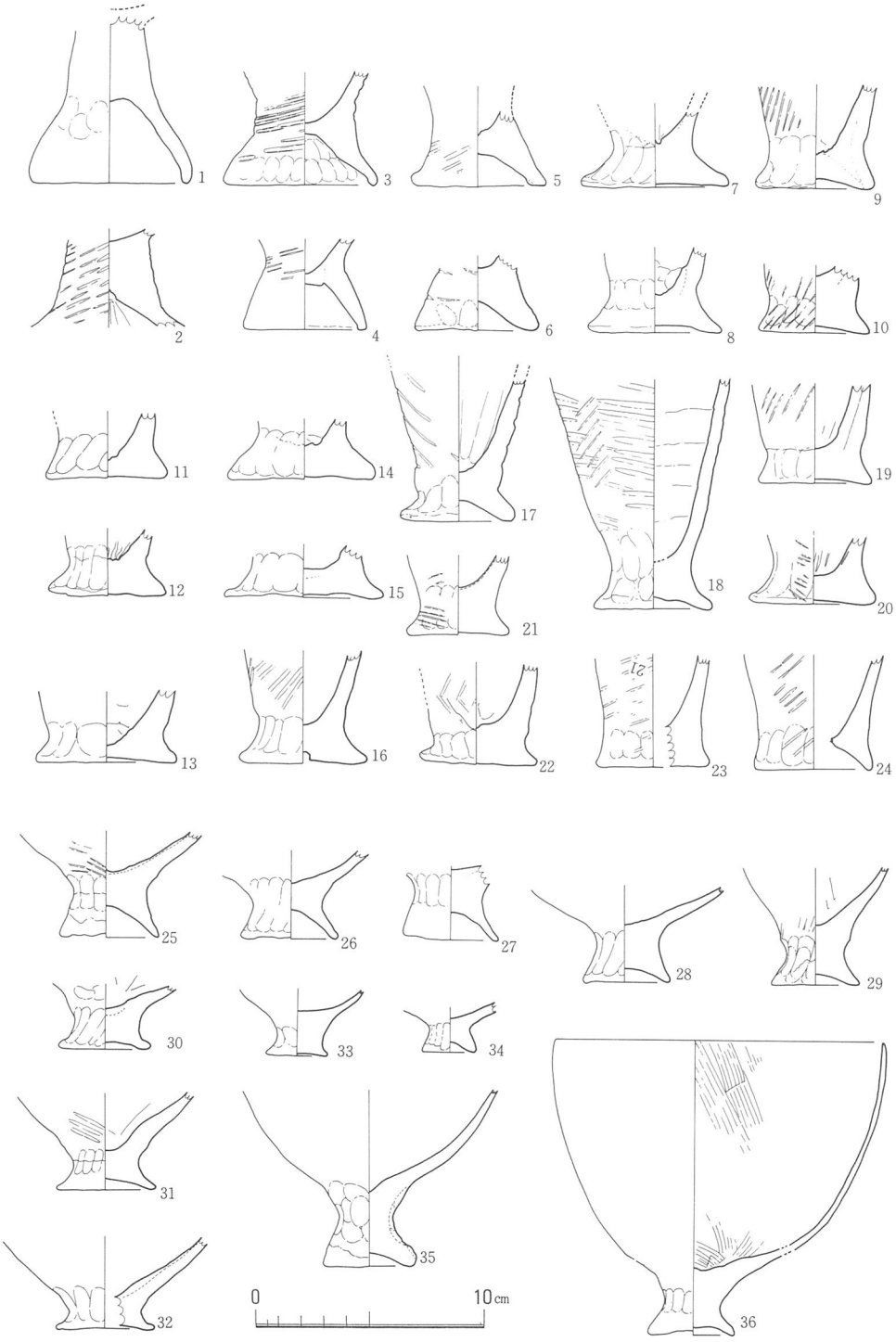
他の土師器と混在した状態で検出され、平面的にも立体的にも顕著なブロックを観察することはできなかったが、Ａ24ＧＷ、同ＨＷの一隅では、整理段階の所見も加味すれば、30～40個体分のまとまりをもつところがわずかにあり、例えばＧＷの一部では、約40個体のとりあげ作業中30個体余がIII式の台脚で占められていた。

製塩土器Ｉ・II・III式の全てがみられ、Ｉ式２個体、II式約240個体、III式約120個体を数える。型式の判別ができないものを含めても、II式が全体の2/3近くを占めている。

Ｉ式(第49図１・２)のうち(２)は脚柱部がやや短く、脚裾も開き気味になって、右上がりのタタキ目が全面に施されている。緻密な胎土ながら、２mm大の砂粒を含んでいる。

II式(３～24)は、脚端径が５～６mm大のものが主流で、脚台部が高めのもの(３～４)、脚裾がへたって平底をなすもの(12～16)、くびれの小さいもの(19・20・22～24)坏部底の厚いもの(７・８・10・18・21)、薄いもの(11・13・24)、脚底部が上底になっているもの、平底のものなど変化に富んでいる。数量的には、いずれも20個体前後づつ平均的にみられるが、(11～16)に似るタイプは60個体近くあり、(22～24)に似たタイプのものは10個体以下と少ない。体部の観察ができるものにはほとんどに平行タタキがみられ、脚台部の指押えの下に痕跡的にみられるものがある(10・20・21・23・24)。概して１～３mm大のふぞろいの砂粒が多く含まれている。

III式は脚端径が４cm前後のものが多い。これにも変化が多く、脚底部の上底が６mm以上あるもの(25～27)と２～３mm前後のもの(28・29・35・36)、低い脚裾からすぐにくびれて坏部になるもの(30～32)、脚端径が2.5cm前後の小さいもの(33・34)がある。体部外面には、タタキ目を残すもの(25・31)と指押えやナデを施したもの(35・36)の二様が見られる。(35)は脚柱部がやや高めで指押えが顕著に観察され、特異な形をしている。胎土の点でも、他のIII式が砂粒の少ない均質な胎土であるのに比べ２mm前後のふぞろいの砂




第49図　Ⅲ区　91－ＯＲ肩部出土製塩土器実測図

粒を多く含んでいる。灰白色系の色調とともに、他の土器と容易に識別できる。この土器溜りでは数個体分が出土している。(36)は体部下端と脚部とは完全には接合しなかったものの、本遺跡出土品唯一全形を想定できるものである。口径14.5cm、器高13cm前後、容積1,100cc前後になると思われる。Ⅲ式の一般的な大きさになると考えてよいのではなかろうか。外面には煤が付着し、薄い器壁内面は全体的にハケ目痕が観察される。

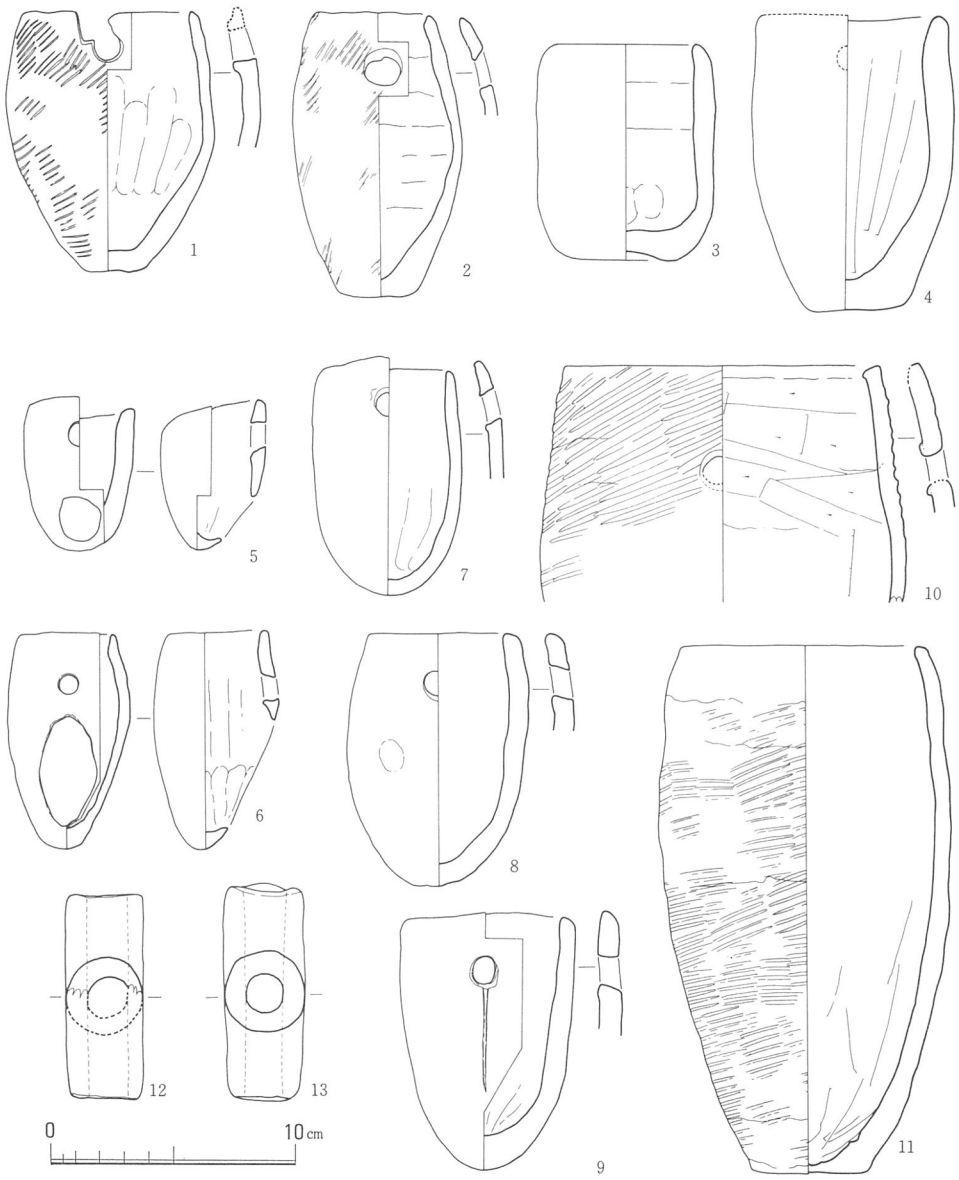
(藤田)

**蛸壷形土器**（第50図）　総個体数の約半数がここから出土しており、飯蛸壺約200点、蛸壺約30点を数える。特にA24HWからの出土量が圧倒的で、このありかたは土師器・製塩土器と同じであり、これらとほぼ同時期に堆積したと考えられる。飯蛸壺では、平底でタタキ目のあるもの約15点、平底でタタキ目のないものは約20点、丸底、尖底のもの約40点、小形のもの5点が出土している。ここでは、全体の形状がほぼ分かる29点の内20点を示す。今回の調査ではコップ形の蛸壺形土器が非常にバラエティーにとんだ形態、法量、調整をとることが大きな特色である。また釣鐘形といわれる土師質の飯蛸壺は、中世の包含層からしか出土せず時期限定はできない。

(1・2)は平底で斜方向にタタキ目がある。斜方向にタタキ目がつくものは、内弯する体部を持ち、88－ORで出土した第40図(11)のように横方向にタタキ目がつくものは直線的にのびる体部を持つ傾向にある。両者には胎土にも違いがみられ前者は灰色系であるのに対して、後者は精良、軟質で黄橙色系が多い。(1)は口径7cm前後、器高10.7cmを測る。紐穴部分が欠損しているが使用による破損と思われる。(2)は口径4.5cm、器高11.7cmを測る。紐穴の内側上部が二箇所で凹む。紐ずれによるものと考えている。共に外面のタタキ目は磨滅により消えている。

(3)は口径5.8cm、器高8.8cmを測る凹み底である。残存部に紐穴はないが法量から今回は飯蛸壺と考えた。凹み底のものは全体で1点だけしか出土していない。(4)は平底で外面にタタキ目が残らないものである。口径7.8cm、器高12.2cm。体部は約1/3ほど欠損しており、紐穴もわずかに残るのみである。

(5～9)は丸底、尖底である。口径は5cm以下と5～8cm前後のものとに大別できる。(5)は口径4.0cm前後、器高6.5cm前後で飯蛸壺の中でも小形のものである。口縁部は紐穴のある面から背面にかけて斜めに擦り減っている。また紐穴のある面の体部には穴があいている。(6)は口径4.1cm、器高8.9cmである。体部外面は(5)同様紐穴の面に穴があく。このように口縁部が傾斜するものや、体部に穴のあくものは同じ飯蛸壺でも、大形品にはみられない。




第50図　Ⅲ区　91－ＯＲ肩部出土遺物実測図

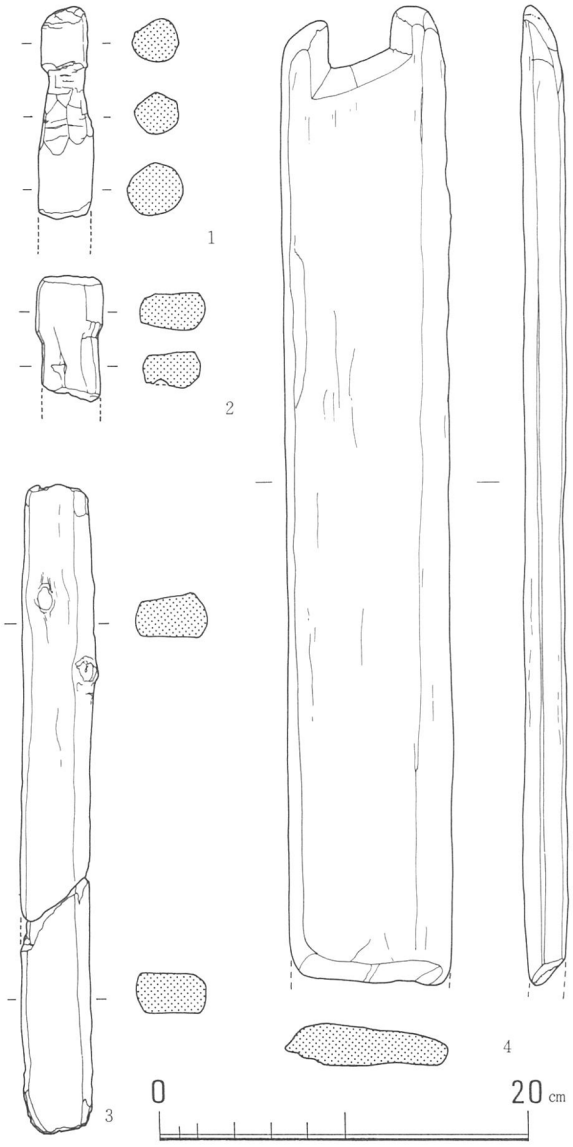
(10・11)は蛸壺である。(10)は復元口径13.0cm。体部上半は僅かに内弯する。外面はタタキ目が口縁部まで施され、内面はナデにより平滑に仕上げる。紐穴の痕跡が認められる。本遺跡ではこの他にも同形態のものが出土しているが、紐穴を確認したのはこの例のみである。(11)は口径10.2cm、底径4.8cm、器高21.6cmを測る。第40図(18)から判断すると欠損部分にも紐穴はないであろう。外面はタタキ、内面はナデにより平滑に仕上げる。

タタキ目は磨滅のため一部消えている。これについては製塩土器とする考えもあるようだが、器壁が厚い点や火を受けた痕跡がない点から、また外面の一箇所あるいは数箇所でタタキ目が擦れて消えているがこれを蛸壺を引きずった際についたものと考え蛸壺とした。今回蛸壺と報告しているものについては明確に甕・鉢と分離することができなかったので今後も検討していきたい。

（禰宜田）

**土錘**（第50図12・13）　数点が先に示した土器類と共に出土した。端部を垂直に切ったもの(12)と丸味をもつもの(13)とがある。(12)には煤が付着する。（禰宜田）

**木製品**（第51図）　木製品、加工木を合わせて約10点と自然木が、先に示した土器類と共に出土した。木製品で機能の明らかなものはない。自然木の方が圧倒的に多い。土師器、製塩土器類がこの部分から集中的に出土しているのに対し、木製品は少なく88－ＯＲで出土した量の方が多い。




第51図　Ⅲ区　91－ＯＲ肩部出土木製品実測図

（1）は途中に抉りの入ったもので、他に数点が出土している。（4）は残存長53.4cm、幅9.2cm、厚さ2.3cmを測る。抉りの底辺部は斜めに切られている。この部分には鋭利な加工痕がみられる。図の下端面にも同様の痕跡がみられることから、この部分にも同様の抉りがついていたと思われる。表面は磨滅しており、表面の加工痕は不明である。（禰宜田）

91－ＯＲ内出土遺物（第52～57図）

古墳時代前・後期の遺物が出土している。総量は少なく、両期の層・遺物は数10cmの間層をもって明確に分離されるところ（Ａ24ＧＷ・ＧＸ付近）と、薄い有機質の層、細砂層によってやっと区別できるところ（Ａ24ＣＴ～ＥＶ付近）、両期の川底の峻別が困難で混在しているようなところ（Ａ19ＹＱ・ＹＲ付近）があった。

土師器は全体に満遍なく出土し、一部は左岸肩部出土遺物と接合するもの、97－ＯＲ内遺物と接合するものがあったが、いずれも約10m以内の範囲で検出したものである。

後期の遺物はややまとまって出土し、Ａ24ＪＹ～ＮＹ（第56図）、同ＧＸ～ＧＷ（第55図４）、同ＢＲ～Ａ19ＹＱ（第54図）の付近のものが多い。下流寄りには須恵質飯蛸壺が比較的多く検出された。とくに第54図の大甕の破片はＡ24ＣＳ・ＢＲ・ＡＱ・Ａ19ＹＱの左岸近くに集中して出土しており、この南西縁部に関連期の生活面があることが想定される。

（藤田）

土師器（第52・53図）　全部で約60点が出土している。

壺は15点ほどが出土している。壺Ⅱは２点ある。第52図（２）は口縁部がかろうじて残る小破片である。口縁部内外面は貝殻圧痕による綾杉文である。この文様は、東海地方で「柳ケ坪」型土器といわれる土器の文様に通じる。内面には顔料と思われるものがつく。にぶい黄橙色。壺Ⅳは８点出土しており第52図（３）では口縁部のほぼ全体に波状文がつく。小型丸底壺は３点出土し２点を図示した。（第52図５・６）

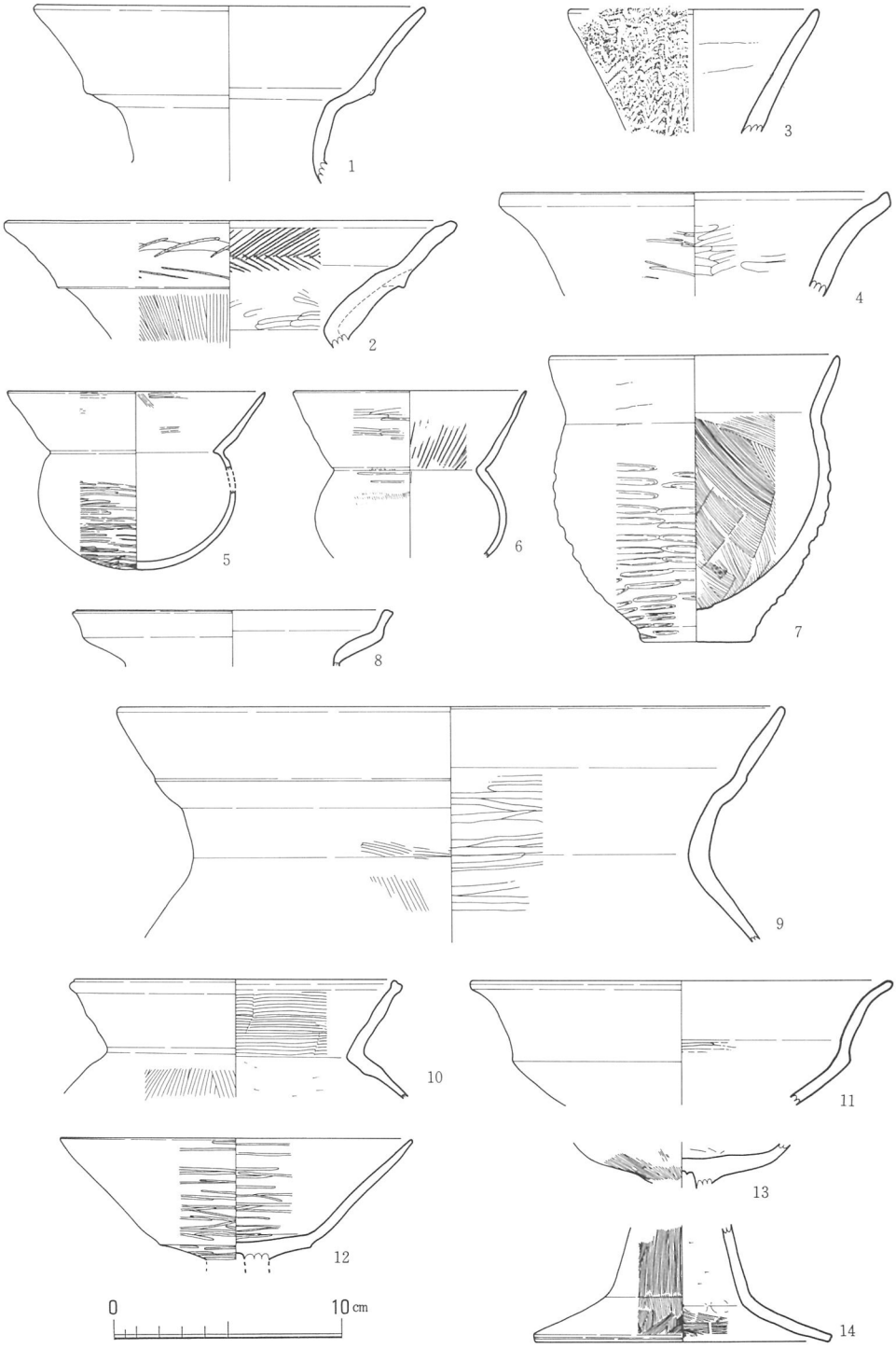
甕は約20点出土している。甕Ｉは、第52図（７）のほかは底部破片である。（７）は体部外面は横方向に１cmあたり２本の溝のタタキが、底から見ると八角形に整然と施される。このタタキの手法は蛸壺形土器の中にも認められる。他に第52図（８・９）を示した。

高坏は12点出土している。高坏Ｉａ、Ｉｂ、Ⅱｂの他、第52図(13)に示すＩｃがある。口縁端部も残っていない破片だが碗状を呈するものと思われる。外底面に放射状のハケ目が残る。この形状の高坏は今回の調査では１例しか確認していないが他のものと比べ新しい要素をもつ。

鉢はさまざまな形態のものが出土しておりその一部を第52図に示した。第53図（３）は口径29.6cmを測り、体部外面は不定方向のハケ、内面はヘラケズリ、口縁部内外面は横方向の板ナデである。いわゆる二段屈曲鉢も１点ある。

またこの他分類にはあげなかったが、小形の坩がある。（２）は器壁が非常に厚く、体部外面はタタキで、その後内外面全体にナデをしている。浅黄橙色。同図（４）は小形の手捏ね土器である。

（禰宜田）




第52図　Ⅲ区　91－ＯＲ内出土遺物実測図

第53図　Ⅲ区　91－ＯＲ内出土遺物実測図

**製塩土器**(第53図６～10)　数量は少なく、Ａ24ＢＳ以北では約10点出土している。ほとんどが流路の岸近くで検出されたが、もともとこの付近の砂堆上にあったとは考え難い。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式が出土している。Ⅰ式(６)は１点だけである。残存部の上端から下端の一部にかけて器表のいたみが著しい。部分的にタタキ目痕も観察され、２～３mm大の砂粒を含む。Ⅱ式(７・８)は、体部の遺存のよいものを示した。２点ともⅡ式の中では少ないタイプである。(７)は体部外面にわずかにタタキ目が見える。(８)は底が厚く、体部にタ

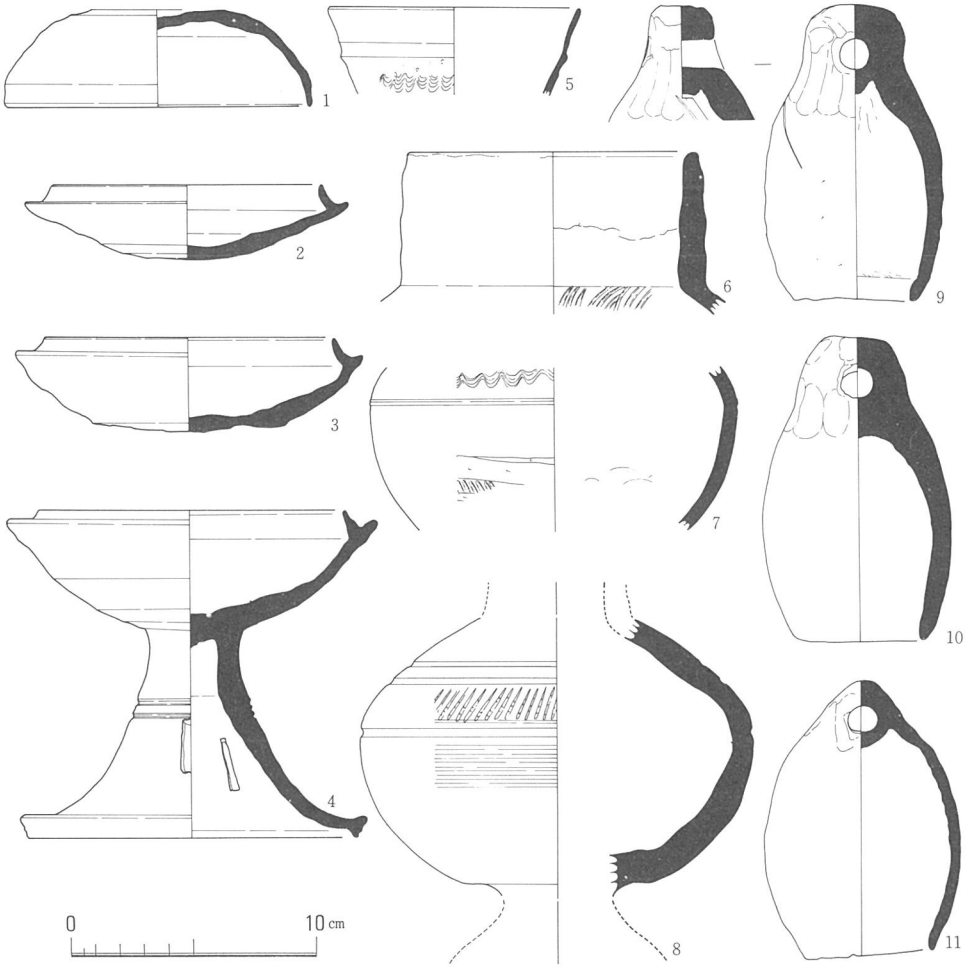
第54図　III区　91－ＯＲ内出土遺物実測図

タキの痕が顕著に残っている。III式(９・10)は２点示した。Ⅰ・II式に比べ均質な胎土である。(10)は脚台が低く開き気味の端部になる。

(藤田)

**蛸壷形土器**(第53図)　全体の約15%が出土している。流路内から満遍なく出土しているが、その中でも下流部分の量が多く、残りも良い。

飯蛸壺は約55点出土しておりその一部を(13～16)に示した。(15)は口径2.9cm、器高8.8cmで、平底の中では今回唯一の小形品である。この他にも平底でタタキ目のあるもの(13)やタタキ目のないものもあるが、さらに(14)に示したが外面にケズリの痕跡を留めるもの




第55図　III区　91－ＯＲ内出土遺物実測図

もある。削っていても器壁が特別薄いわけではない。

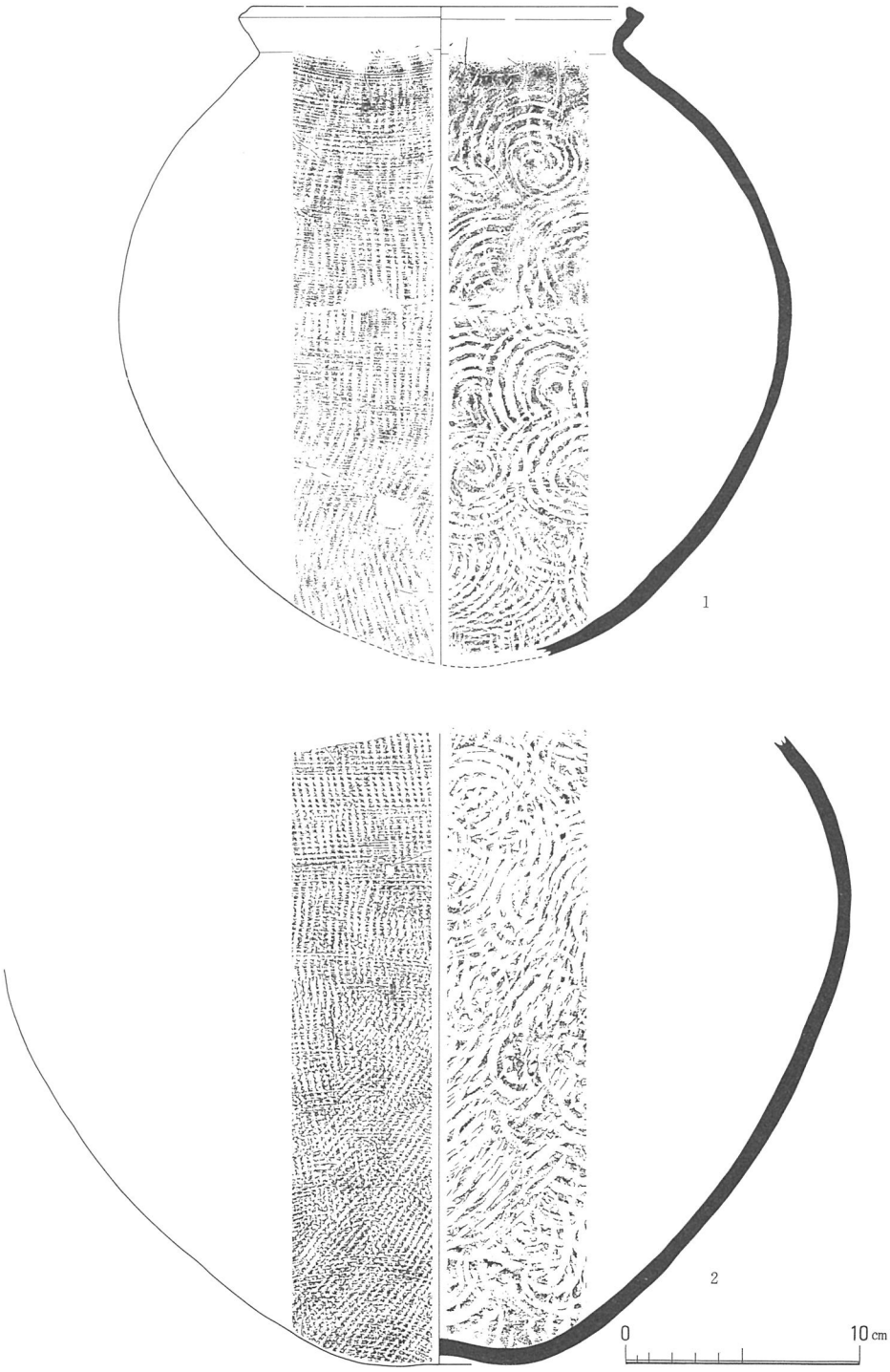
蛸壺は約15点出土しておりその一部を(11・12)に示した。(11)は復元口径10.6cmの破片である。タタキの後口縁部付近はナデ消している。内面は斜めのハケの後ナデを加える。紐穴はない。このタイプの蛸壺の器高は、第50図(11)の例よりやや大きめで約25cm程度になると思われる。(12)は普通の甕と同形態だが、底部の穴が不整形で紐ずれの可能性を考え今回は蛸壺として扱った。表面は磨滅している。

このほか図示はしなかったが外面に煤の付着するものもある。

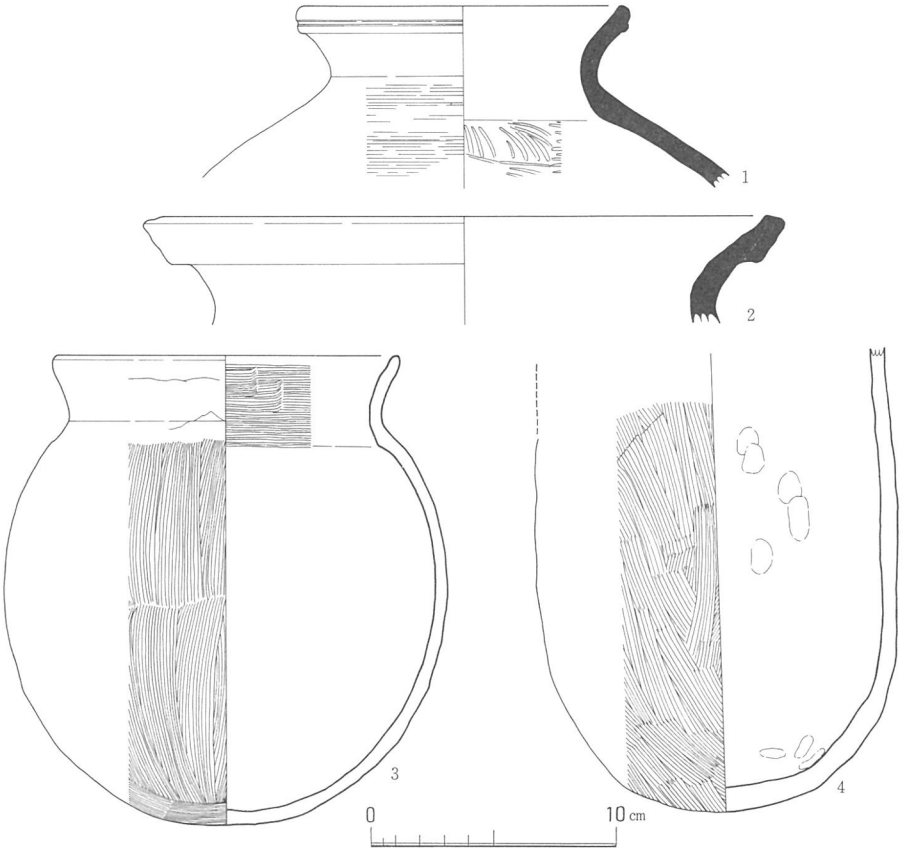
(禰宜田)

**土錘**(第53図５)　流路右岸のＡ25ＨＡ付近と下流のＡ24ＣＴ・ＡＱ付近から数点出土している。両端に丸味があるもの(５)と垂直に切ったものの２種がある。100g前後である。

(禰宜田)




第56図　III区　91－ＯＲ内出土遺物実測図




第57図　Ⅲ区　91－ＯＲ内出土遺物実測図

**須恵器**(第54～57図)　91－ＯＲから出土した古墳時代後期、６世紀後半の遺物。土師器が第57図(３・４)で他は須恵器。古墳時代前期の遺物が流路の肩から集中して出土することに対し、古墳時代後期の遺物は河口付近の出土（第54図、第55図２・３・７・８・11）が目立つが集中はせず、流路内に散在した。以下記載のない調整はナデ。第55図(８)は台付き壺の体部２本の凹線で文様帯を区画し櫛状工具によるカキメの後、同じ工具で刺突文を施文(５・７)は壺。(５)は外反する頸部に波状文を施した後、口縁部との境に凸帯をつまみだす。(７)は腹部。つまみだされた凸帯の上には文様帯が、下はタタキ、ヘラケズリ、ナデを重ねて施す。(６)は大型短頸壺の直立する口頸部。端部は内面から粘土をかぶせるようにナデている。粘土の継ぎ目から、体部を製作する際に口頸部の1/3まで作り、粘土を外から重ねて口頸部を伸ばし、肩部との境は内側から粘土を後補することが観察できる。(１)は坏蓋。天井部は回転ヘラケズリ、口縁端部は丸い。(２・３)は坏身。(２)は、たち

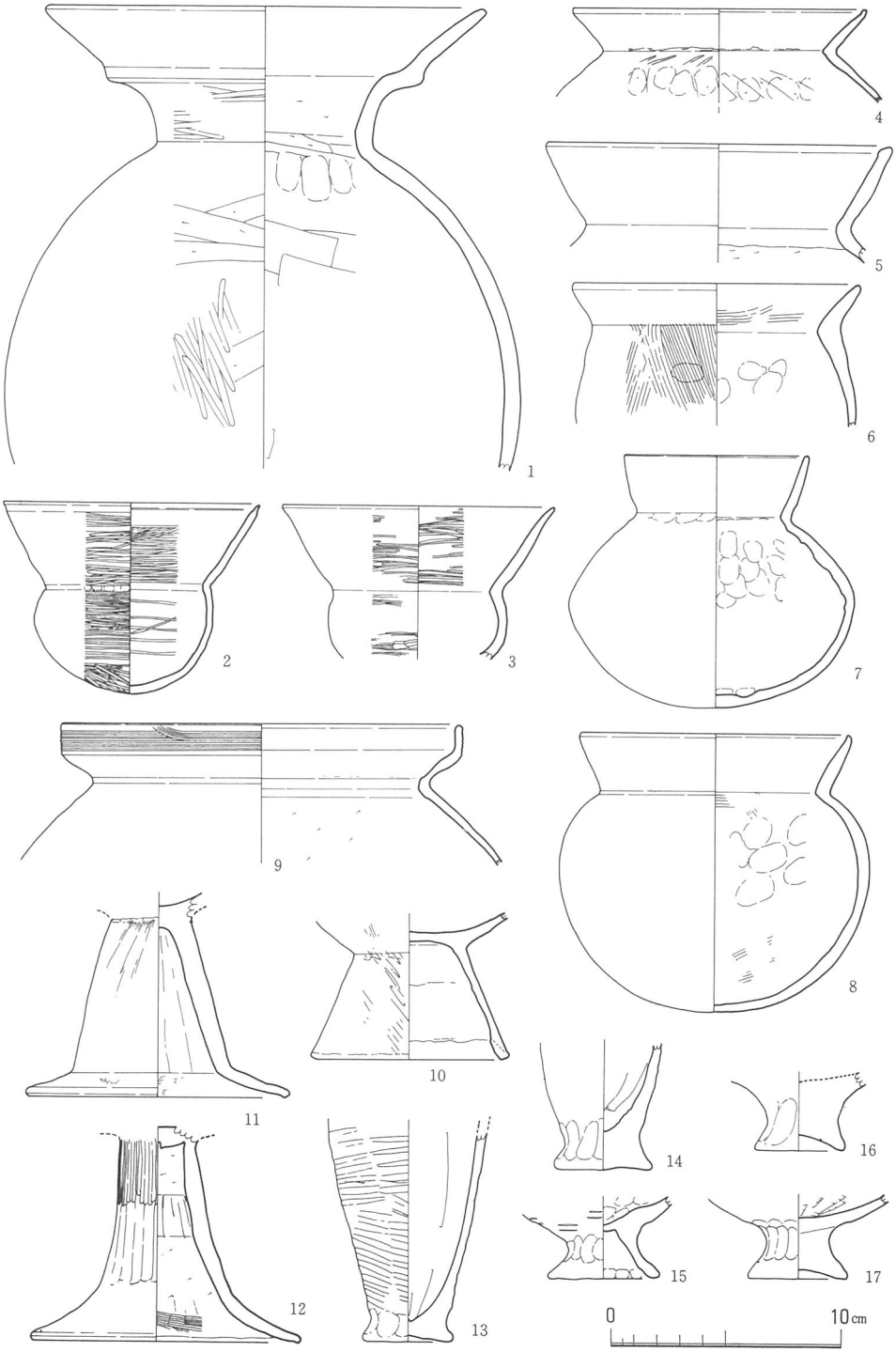
あがりは短く内傾し端部は丸い。受部端部も丸い。底部の回転ヘラケズリは雑。(3)の底部は回転ヘラ切り未調整。(4)は有蓋高坏。坏部のたちあがりは短く内傾し先端をつまみあげる。受部とたちあがりの境に凹線が巡る。脚部との境に粘土の継ぎ目が残る。脚部の端部は段をなし、端面は内傾。脚柱部に凹線が2条巡り、長方形透かしを2つ有す。釣鐘形の飯蛸壺は体部を製作した後釣り手を差し込み、その境を指でナデ消す。紐穴は焼成前に棒状工具により穿孔。体部外面は右上方へラケズリ上げる。体部上方にタタキ目を残すものがあり、上記の調整前にタタキ整形が認められる。口縁端部は内面に折り返す。(9～11)は代表的な3形態。(10)は器壁の厚いどっしりタイプ。焼成が悪く、土師器とみまがう色調で黒斑が広がる。(9)は体部の狭いスリムタイプ。(11)は体部が丸く膨むずんぐりタイプ。第54・56・57図は甕。内面の調整は全て同心円タタキを施す。第57図(1)は口頸部。緩やかに外反し口縁端面は凹線が巡り端部は丸い。肩部外面は平行タタキ後カキメを施す。(2)の口頸部は短く外反する。口縁部は内面から折り返し頸部との間に段をなす。端部は外傾して鋭い。第56図(1)の口頸部は外反し、口縁部は外面から折り曲げて端部をつまみあげる。外面は1本あたり11本の疑格子のはいったタタキの後カキメを施す。内面のタタキの円弧幅が上下で違い、肩部付近は擦り消す。焼成はあまい。(2)は上部欠損。底部は狭く中央が凹む。外面は格子状のタタキの後カキメを施す。第54図は大型甕。流路内で押し流された破片が約60mの幅を持って散在。口頸部は大きく外反、口縁部は肥厚し、頸部との境に段をなす、口縁端部は上につまみあげる。頸部は段の直下から縦方向に2本1組の沈線を施し、2本1組の凹線が3組巡る。底部は平坦に近い。体部外面は平行タタキを施す。(蜂屋)

土師器(第57図3・4)　(3)は甕。前期に比べ口頸部の外反は弱く、口縁部は肥厚し端部は丸い。内面のケズリは行わず器壁は厚い。体部外面はハケメを施す。(4)は長胴甕の下半部。体部は寸胴で底部は丸い。外面は細かいハケメを、内面は下からのナデを施す。焼成は良好。胎土に径2～3mmの小礫を多量に含む。(蜂屋)

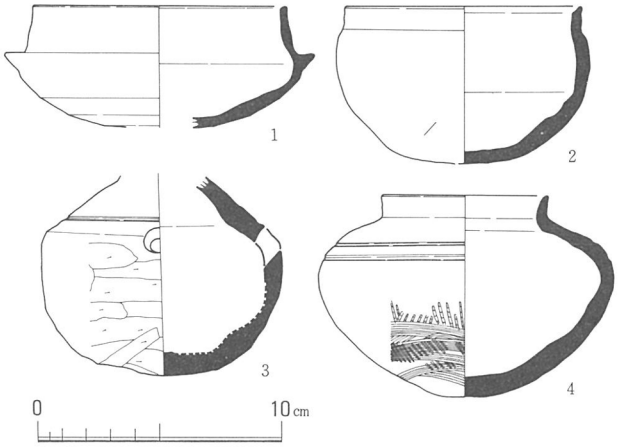
中洲付近出土の遺物(第56～61図)

中洲の一帯では、北寄りの頂部付近と第35図では洲をはずれて広い流路のように示している中洲南縁の一帯と、北西の低い部分で土師器、須恵器、製塩土器等が出土している。後者では遺物は散漫に広がっており、本来中洲上に残された遺物とは考えがたい。

南縁部分には図示できなかった細い古墳時代の流路が西に走り、中洲の砂と同じ砂が埋土になっていた。結果的には多くの遺物がこの縁辺で出土している。しかし、掘削段階で十分にこの流路を認識できなかったこと、広い流路底面の砂礫層を追って中洲南縁を検出




第58図　III区　中洲付近出土遺物実測図



第59図　III区中洲付近出土遺物実測図

したこと、この砂礫層直上出土の遺物が少なくなかったこと等のため、流路内外の遺物を区別できなかった。このため、中洲南縁として一括して扱うことにする。　（藤田）

**土師器**（第58図１～12）特徴的なものを抽出して図示した。

壺は全部で25点程出土している。壺IIは５点出土し内１点を図示した。（１）は体部外面にもケズリの痕跡がみられる。壺V（７・８）は２点出土している。

小型丸底壺は３点出土した。（２・３）の２点を図示した。（２）は復元口径11.2cm、器高8.4cm、体部最大径7.7cmで端部は尖気味に終る。浅黄橙色。

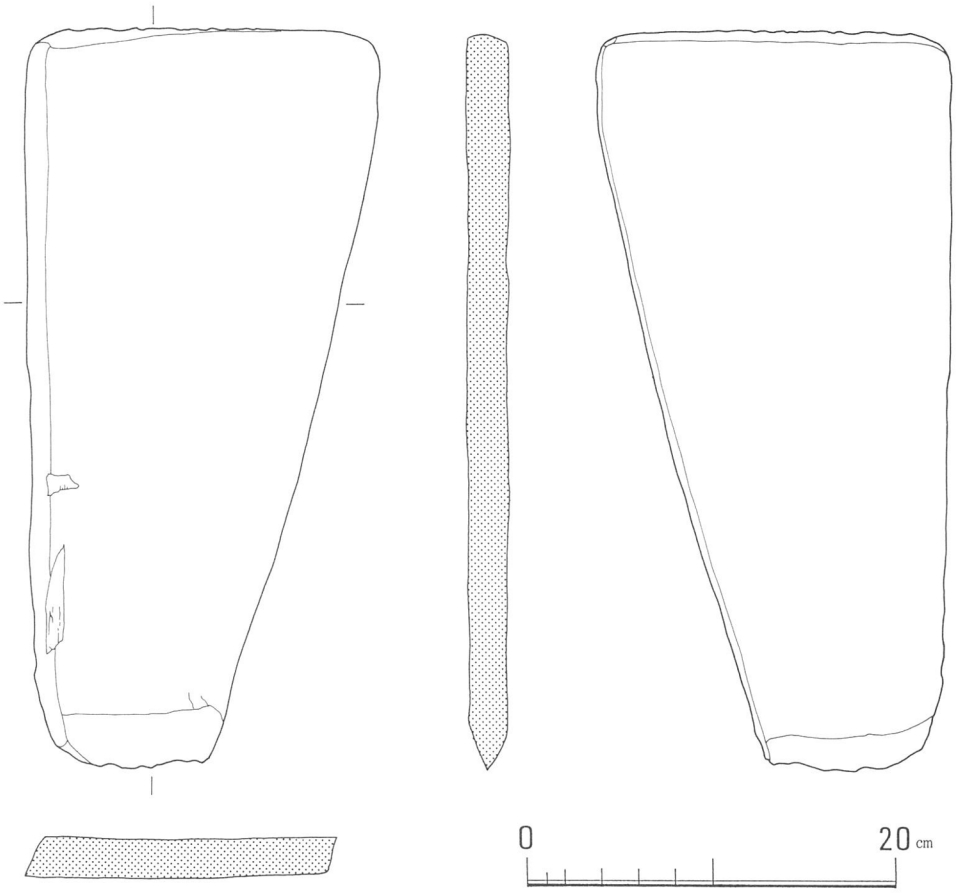
甕は20点程出土した。甕II（４）も１点出土している。甕IIIは10点出土しているがほとんどが口縁部の破片である。（５）は端部に内傾する面を持つ。１点を示す。甕VI（９）は復元口径17.2cmである。口縁部外面には３本単位の櫛状工具により６本の沈線が走る。甕VII（10）も出土している。また甕V（６）は１点出土しており、外面はタテハケで、長胴になると思われる。

甕VI、VIIをはじめとして他地域の影響を受けた土器が、本遺跡のような海浜部の遺跡から漁撈具、製塩土器と共に出土したのは興味深い。

高坏ではIIｂ、IIｃ等約５点がみられる。　（禰宜田）

**製塩土器**（第58図13～17）　約20点出土している。中洲南縁出土が多いがまとまりはない。

II・III式がある。II式（13・14）は体部までよく残っているものがあり、横位の太いタタキがつく（13）。脚台部は低く、くびれ部に指押え痕がある。II式の中では均質な胎土をもち器壁も薄手である。全体的に遺存度がよい。III式のうち（15）は、脚台径が５cm弱あり、脚部の器壁も薄く、他のIII式の土器とは異なっている。本遺跡中唯一の例である。体部に横位のタタキ目が観察される。坏部内面にも指押え痕があってやはり特異な存在である。（17）は、脚台径４cm強で、一般的なIII式のタイプであるが、２～３mm大の砂粒が著しく含まれている。坏部内面に板目調整の痕がみられる。　（藤田）

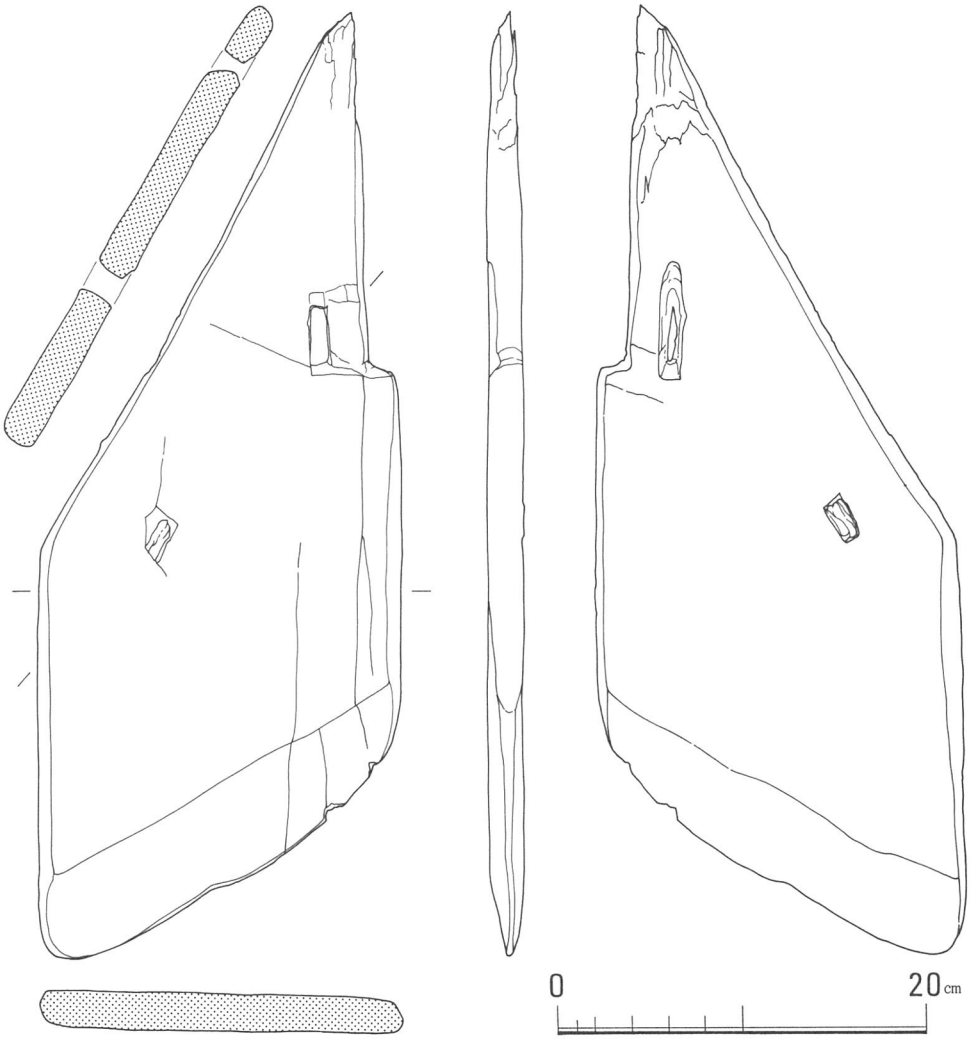



第60図　Ⅲ区中洲付近出土木製品実測図

**須恵器**(第59図)　確実に砂の中に埋没していたのは(3・4)で(1・2)は上に堆積したシルト内の可能性あり。(1)は坏身でたちあがりは高く、受部は水平に突出し端部は鋭い。外面の下から1/2は回転ヘラケズリ。時期が明確な須恵器では最古。5世紀後半。(2)は鉢で口縁部は垂直にたちあがり端部は内傾する。肩部と内面底部に自然釉付着。底部外面はヘラケズリの後ナデ。(3)は甕の体部。上から2/7に位置する最大径で屈曲し1箇所に円孔があき、直上に凹線が巡る。最大径より下は手持ちヘラケズリ。(4)は短頸壺で頸部は外反気味。最大径は上から約2/5に位置する。外面の下半部は細目のタタキの後カキメを逆時計まわりに施す。肩部に自然釉付着。(2～4)は6世紀後半。

(蜂屋)

**木製品**(第60・61図)　第58図に示した土器類と同じ層から、2つの木製品が比較的近接して出土している。第60図の木製品は最大長40.5cm、最大幅19.4cm、厚さ2.2cmを測る。幅の狭い側を両面から両刃状に削っている。表面には手斧痕がかすかに残る。第61図の木




第61図　III区中洲付近出土木製品実測図

製品は残存長51.8cm、幅20.0cm、厚さ2.1cmを測る。左図の上を上辺、下を下辺、その両側をそれぞれ長側辺、短側辺と呼び説明する。上端は若干欠損するがほぼ完形と思われる。下辺は外弯気味であるが、下部1/3ぐらいの所から若干凹んでいる。両面から削り両刃状を呈する。長側辺には長さ19.5cm、幅1.5cmの抉りが入る。またこの抉りのある部分の内側には、側辺に平行して1.0cm×6.4cmのほぞ穴があいている。上辺にも平行して1.0cm×2.4cmのほぞ穴があいている。ほぞ穴には樹皮をつけたままの木が残存する。2つのほぞ穴が長側辺と上辺に平行しているのは、着柄と関係があるのであろう。いずれにせよ着柄方法、用途は現状では不明であり、今後の課題としたい。

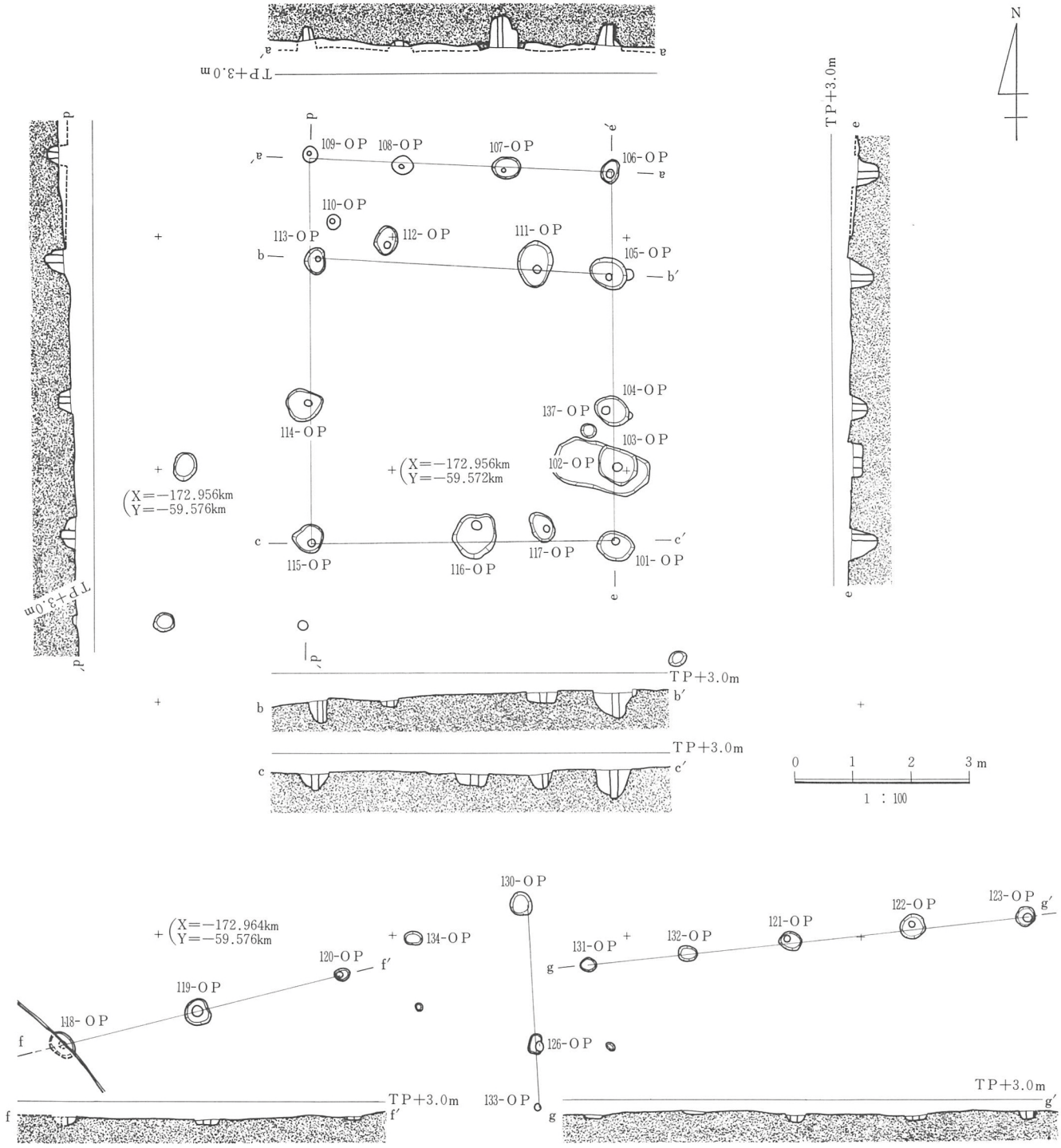
（禰宜田）

101－ＯＢ（掘立柱建物）（第63図）

Ⅲ区の砂堆上に位置する、東西棟の２間×２間の母屋に北庇がついた掘立柱建物である。梁間は4.5～4.7m、庇の出は1.8mで桁行は5.0～5.25mである。柱筋109－ＯＰ～106－ＯＰの柱掘形が他の柱掘形に比して小さく、柱痕跡も10cm前後と小振であることから、109－ＯＰ～106－ＯＰは北庇になると思われる。母屋において柱筋133－ＯＰ～105－ＯＰ・155－ＯＰ～101－ＯＰが、柱筋133－ＯＰ～115－ＯＰ・105－ＯＰ～101－ＯＰに比して柱筋に乱れがあること、後者の中央柱穴114－ＯＰ・104－ＯＰが同じ柱筋の他の柱に比べて浅く妻柱を思わせることから、後者が梁間であり、前者が桁行である。また柱割に特長がみられ、母屋の南側柱（115－ＯＰ～101－ＯＰ）は２間であるのに対して、北側柱（133－ＯＰ～105－ＯＰ）は３間である。また北側柱３間の柱間隔が両端の心々間（113－ＯＰ～112－ＯＰ・111－ＯＰ～105－ＯＰ）が約1.2mと狭いのに対して、中央は2.6mと広くあけられており、出入口を思わせ、北庇の３間であるがほぼ等間隔で設けられているのと対照をなしている。建物に直接関係しない103－ＯＰ・117－ＯＰも柱筋にのっていることから、束柱のような付属する柱穴と思われる。また東梁間の104－ＯＰ・105－ＯＰには柱抜取り跡が観察される。柱掘形の埋土は概ね、黒褐色（10ＹＲ3/2）粘土混シルトである。遺物は106－ＯＰ・115－ＯＰの柱掘形から土師器の小片が出たほかは、103－ＯＰの埋没後に掘られた土坑102－ＯＯから出土した須恵・土師器の小片ぐらいで、建物の時期を決定できるものはない。

建物の造営年代を決めるにあたって、柱掘形が一つの目安になる。柱掘形は楕円形もしくは形の崩れた円形であり、母屋では短軸が40～60cm、長軸が50～80cm、庇部分では短軸が25～35cm、長軸が30～50cmである。一般に和泉地方では古墳時代の柱掘形に直径50cm前後の円形が多く、７・８世紀の方形掘形とは一線が画される。101－ＯＢも古墳時代の可能性が高い。また第６層の中途から柱掘形が掘り込まれているらしいことからも古墳時代後期に属すると思われる。

古墳時代後期の建物とすると注目すべきいくつかの点がある。既に述べた、桁行の柱割を変えて庇が付く側を３間にしている点、北に庇を付けた点と、母屋の柱筋が乱れているのに対して、庇の柱筋が非常に整っている点、次に述べる真南北・東西方向を意識して建てた点である。東柱筋（106－ＯＰ～101－ＯＰ）は北で西へわずか０度30分、西柱筋（109－ＯＰ～115－ＯＰ）は北で西へ１度の振れであり、南側柱筋（115－ＯＰ～101－ＯＰ）が東で北へわずか０度40分の振れであり、北側柱筋（113－ＯＰ～105－ＯＰ）が東で南へ




第62図　Ⅲ区　101－ＯＢ平面図・立面図

3度、北庇の柱筋が東で南へ3度20分の振れである点からしても、真南北・東西方向を意識したことは間違いなかろう。畿内において建物の主軸に真南北・東西方向が採用されるのは、飛鳥寺の創建（588年）以降であり、宮殿でも7世紀中葉以降と考えられている。和泉地方において一般家屋に真南北・東西方向が採用されるのは、泉南市海会寺遺跡にみられるように8世紀初頭以降であると思われる。101－ＯＢの面積32.4m²は、高石・和泉・泉大津市にまたがる大園遺跡の古墳時代の掘立柱建物の内でも大きい方に属し、同遺跡の古墳時代の平均的な屋が10～20m²であるといわれているから、普通の屋の倍の面積を有しており、納屋のような仮設的な建物とは考えられない。またⅢ区では101－ＯＢ以外、建物はみとめられないし、次に述べる柱列118－ＯＦ・212－ＯＦがこの建物に付随する塀になると思われることから、この空間で101－ＯＢが果たしていた役割に注意を払う必要があると考える。

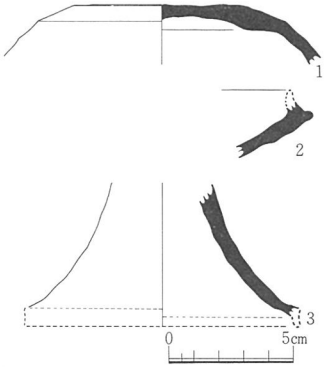
（黒田）

121－ＯＦ（塀）（第62図）

121－ＯＰ・122－ＯＰ・123－ＯＰとその延長線上のピット131－ＯＰ・132－ＯＰからなる。柱の心々間は121－ＯＰ～122－ＯＰが2.0m、122－ＯＰ～123－ＯＰが2.15mを測る。対して131－ＯＰ～132－ＯＰ・132－ＯＰ～121－ＯＰはそれぞれ1.7mであり、やや狭い。掘形は平面が円形もしくは楕円形ですり鉢状を呈し、径30～45cmを測り、深さは7～15cmで、柱痕跡は直径10～15cmである。柱掘形の埋土は黒褐色（10ＹＲ2/3）シルト混粘土である。柱筋は東で北へ4度30分の振りで真東西方向に近いこと、対になる柱穴が不存在で建物にならないこと、掘形の形状が古墳時代のそれに属すること、掘立柱建物101から約7mという至近距離にあることから、101－ＯＢに伴う塀になるものと思われる。柱筋の西延長線上には119－ＯＰ・120－ＯＰがあり、柱筋を通した可能性はある。（黒田）

遺物（第63図1）

柱列の1つを構成する122－ＯＰから須恵器坏蓋が出土している。柱痕跡に被さるようになっていた。121－ＯＦ廃絶後の混入と考えられる。端部を欠失しているが、復元口径は17.5cmあり、6世紀後半と思われる。（黒田）



第63図　Ⅲ区　122・126－ＯＰ出土遺物実測図

126－ＯＦ（塀）（第62図）

130－ＯＰ・126－ＯＰ・133－ＯＰからなるピット列である。総長約3.5mと小規模だが、杭穴と思われる133－ＯＰ以外はしっかりした柱穴で、柱掘形は径25～40cm、

柱痕跡は径15cmを測る。

126－ＯＦは真南北方向をとり、ほぼ101－ＯＢの南北中心線の延長上に位置することから、101－ＯＢに附随した施設と考えたい。また118－ＯＦと121－ＯＦは、このピット列を境にして方向を違えているかに見えることから、これらは互いに有機的連関をもつと考えたい。このピット列の１つから若干の遺物が出土している。遺物の出土状況などから７世紀前半には消滅していたと考えられる。

（黒田）

遺物（第63図２・３）

126－ＯＰの柱痕跡に突き刺さるようなかたちで出土した須恵器の高坏の脚部と、126－ＯＰ脇の遺構面から出土した須恵器の坏身の口縁部破片や土師器小片がある。第63図は高坏と坏身の実測図である。高坏はほぼＴＫ217窯併行と思われる。

（黒田）

118－ＯＦ（柱列）（第62図）

121－ＯＦの西延長線上に存在する120－ＯＰから派生するかにみえる柱列で118－ＯＰ・119－ＯＰ・120－ＯＰの３基からなっている。柱掘形は径25～50cmを測る円形もしくは楕円形を呈し、すり鉢状に掘られている。柱痕跡は径12～17cmを測る。柱掘形の埋土はいずれも黒色（10ＹＲ2/1）シルト混粘土である。柱心々間の距離は118－ＯＰ～119－ＯＰが2.35m、119－ＯＰ～120－ＯＰが2.45mを測り、柱筋は東で北へ約13度振っている。

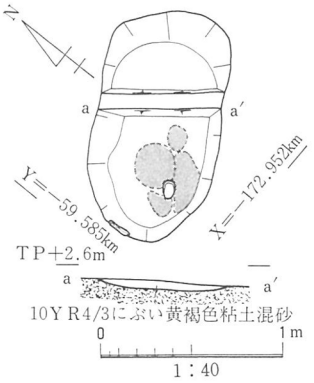
柱列118－ＯＦと121－ＯＦは、掘形の形状・法量・埋土とも似ていること、126－ＯＦと120－ＯＰ・132－ＯＰの距離がそれぞれ約３ｍで、126－ＯＦを対称軸にした形で118－ＯＦと121－ＯＦが存在することから、これらは個々ばらばらに存在したのではなく、一連の遺構の可能性が高いと思われる。

（黒田）

127－ＯＯ（土坑）（第64図）

長径130cm、短形70cm、深さ６cmを測る楕円形の土坑である。埋土は、にぶい黄褐色の粘土混砂で炭化物を含み、少量の焼土塊も認められた。遺物は皆無であるが、第６層上面から掘り込まれたと思えること、125－ＯＲ埋没後に、その凹地に堆積した平安時代前期の黒色土器（第71図17）を含む黄褐色粘土層が、本土坑の埋土を覆っていたことから、古墳時代後期から平安時代前期までのいずれかの時期に属する土坑と思われる。性格は不明である。

（黒田）




第64図　Ⅲ区　127－ＯＯ
平面図・立面図

d）中世

一部古墳時代後期の101－ＯＢ検出面で確認したピット列の他は第４層中で確認された。主な遺構はⅢ区山側（Ａ25ＯＥとＫＬよりも山寄りの部分）で犂溝と考えられる小溝群（84－ＯＺ）と、その北側（Ａ24ＡＸ・ＥＵ・Ａ25ＧＦ・ＪＹの間）で沼（94－ＯＬ）を検出した。

砂堆の広がっていた部分にのみ小溝群が認められることになり、それより北側で顕著な遺構を検出することができなかった。

いずれも、瓦器・土師器片がわずかに出ている程度であり明確な時期比定はできないが、94－ＯＬは、中世を通して沼地状を呈していたと思われる。（藤田）

94－ＯＬ（沼）（第65図）

91－ＯＲ埋没後は、砂堆と中洲の間に粘土やシルトの厚い層が堆積しており、沼地状を呈していたと考えられる。

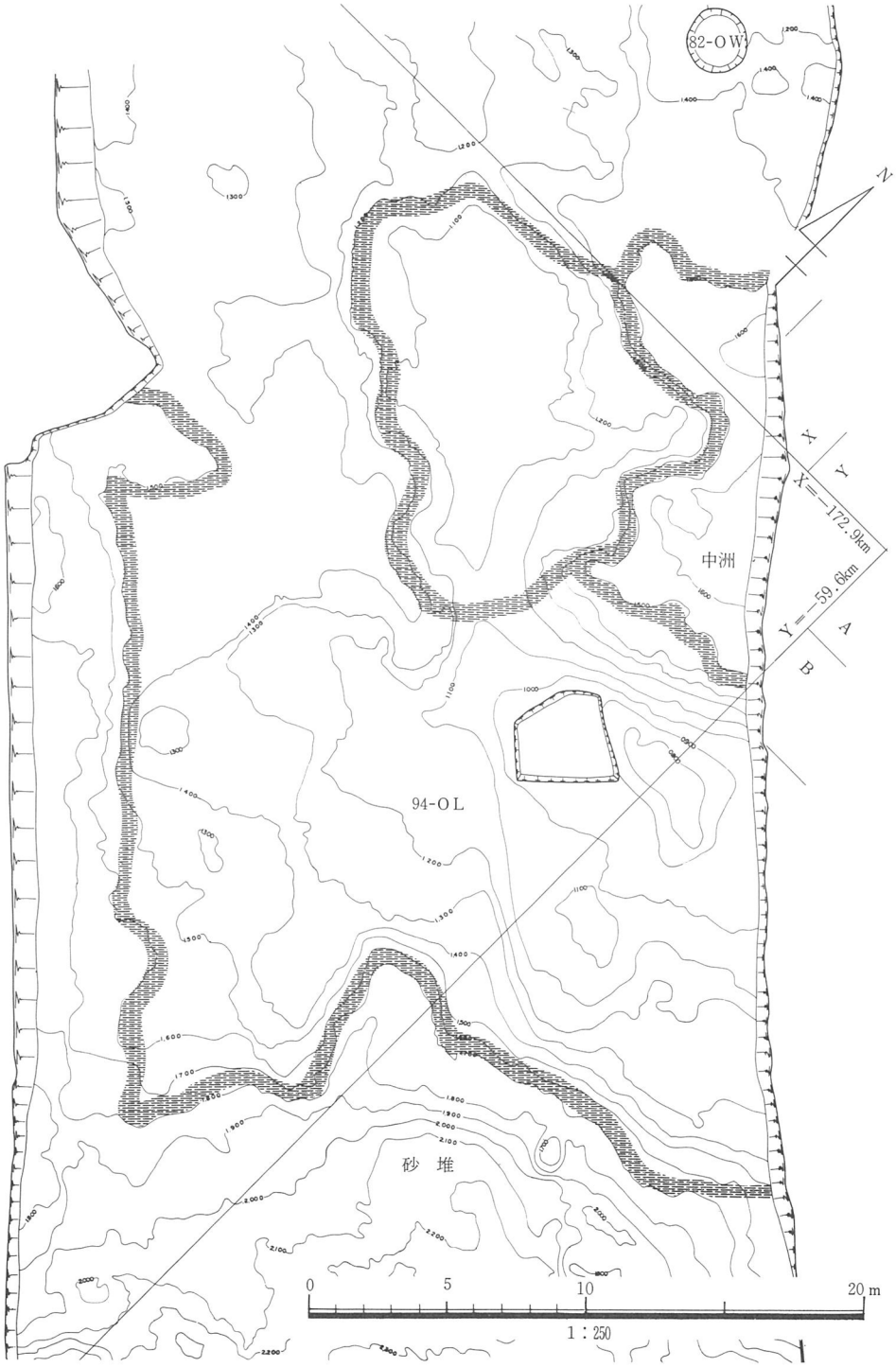
検出できた沼の規模は、南北約25m、東西35m以上、深さ30～80cmで、底のレベルは最深部でＴＰ＋0.8mである。沼は砂堆と中洲ではさまれた部分（Ａ24ＣＹ，Ａ25ＣＡ付近）では深いが、西へいくにつれて浅くなっている。中洲の西側では南北約10m、東西約12m、深さ50cm程度、底のレベルＴＰ＋1.0mを測る小さな沼も確認している。これについては大体舟底状を呈する。

沼の埋土は、砂堆と中洲にはさまれた部分付近では、粘土・シルト系の層であるのに対し、西側へいくにつれて砂の混入度が増す。また小さな沼の方も砂混シルト層である。したがって、砂堆と中洲にはさまれた部分では、ほぼ滞水状態であったのに対し、西側から海側にかけては多少の水の動きがあったと考えられる。中洲の西側肩部が、多少凹凸を呈しているのも、水の動きにより肩が崩された結果であろう。この水の動きにより小さな沼の方が先に埋まったと考えられる。

このため沼の肩は、砂堆・中洲の部分については比較的容易に確認することができたが、残りの海側から西側にかけては肩と埋土との識別が非常に困難で、第65図の沼の範囲は海側の一部については確認することができなかった。西側部分で直線的に示している肩についても多少の移動があると考えている。

この沼内からは、あまり多くの遺物を検出することができなかった。

沼の最下層付近からは、第71図(16)に示した黒色土器片が出土し、その上層からは瓦器の小片が出土している。量は非常に少ないわけであるが、下層の遺物が古い点を評価すれば、沼形成の上限は平安中期頃に求められる。




第65図　Ⅲ区　94－ＯＬ平面図

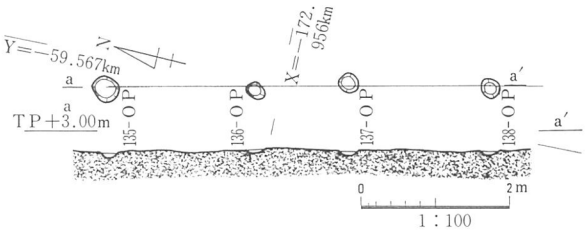
この沼はその後、中洲の西側部分から埋没していった。図示はできなかったがA24DU，EV付近（肩が切れる部分）に新たな砂洲が形成されたのである。この砂洲の中からは、第72図(6)に示した瓦器等が出土している。これも数少ない資料からであるが、新しい砂洲は、13世紀代には形成されていたことになる。

この沼の最終埋没時期は決められないが、中洲と新たに形成された砂洲より海側の部分では、近世以降の犂溝と考えられる小溝が検出され、積極的な土地利用が行われていたのに対し最後まで沼として残った東南部のA25FA，FC，CA付近では、上層において何ら遺構を確認できなかった。この部分は、調査前においてもアシの生える湿地帯であったのを考えると、現代にまで影響を及ぼすものであったわけである。

（禰宜田）

135－OF（ピット列）（第66図）

135－OP・136－OP・137－OP・138－OPからなるピット列で、第6層もしくは第9層上面で、101－OBなどの古墳時代後期の遺構と一緒に検出された。埋土は灰白色（10YR7/1）粘土で、第4層上部の土色・土質に近く、第4層上面もしくは中途から掘り込まれたピットの可能性が高い。方向は北で西に11度30分振り、掘形は径20～30cm、心々間距離は2.0・1.25・1.9mを測る。



第66図　III区　135－OF平面図・立面図

稲木のような農耕に関係する施設と思われる。III区の砂堆上においては、第4c層が広く分布しているが、この層は耕土でなかった可能性が高く、その上層もしくは上面からの掘込みであろう。

（黒田）

84－OZ（犂溝）（第67図）

III区山側の第4層上面で検出された調査区にほぼ直交する、幅10～20cm程度の浅い小溝群で、III区山側壁より13～20mに所在する段の上で顕著に現われる。小溝群の埋土はベースの第4層の土をやや淡くしたような色調で、土質は同じである。小溝群の埋土からは瓦器・土師器の小片が数多く出土したが、これも第4層の出土の遺物とほとんど変わらない。小溝群の分布の密なところでは50cm間隔でみられ、また流水の跡がみられないことから、犂で耕した際、生じた溝状の犂痕であろう。犂溝と考えた際その方向がある程度、犂溝を生じた当時の地割を反映していると考えられる。中世の地割としてこの地では、文献から

第67図　III区　84－ＯＺ平面図

神前里の条里が考えられる。しかし、現在の地割から確実に神前里の地割だというものを抽出することは困難である。

今回検出した犂溝の方向もII区・III区間の現在の里道の方向と毫も異ならないから、この犂溝をすべて中世のものとするのは早計かもしれないが、III区山側壁際にみられる第４ｃ層の段との方向の一致から、中世の可能性が高いと考える。

（黒田）

e）近世以後の遺構

具体的にどの時代まで遡れるのか決めてを欠くものが多い。Ⅲ区南東部ではⅡ区から続く第３層が存在したが、Ⅱ区同様現地形と基本的に一致し、遺構を確認できなかった。前項で中世犂溝としたもののうち南寄りの一部には、第４層上面検出のものが含まれており、時期を下げて考えなければならないものがある。

第68図　Ⅲ区　74－ＯＷ

北西部には、中世の沼（94－ＯＬ）埋没後低く軟弱な砂層部分を流れた自然流路が数条あり、この埋没後、畑の畝跡、犂溝と思われる小溝群、井戸が検出された。

井戸はＡ25ＧＧ、Ａ19ＸＶで計２基検出された。調査時点ではすでに埋没して地表に痕跡をとどめていなかったが、近時まで口を開けていたと思われる井戸である（第68図）。

Ⅱ区中央付近に該期の遺構が全く検出できなかったのは、中世沼の埋没が十分に進行せず、一部湿地の状態が続き、耕地等への転換が容易でなかったためと思われる。（藤田）

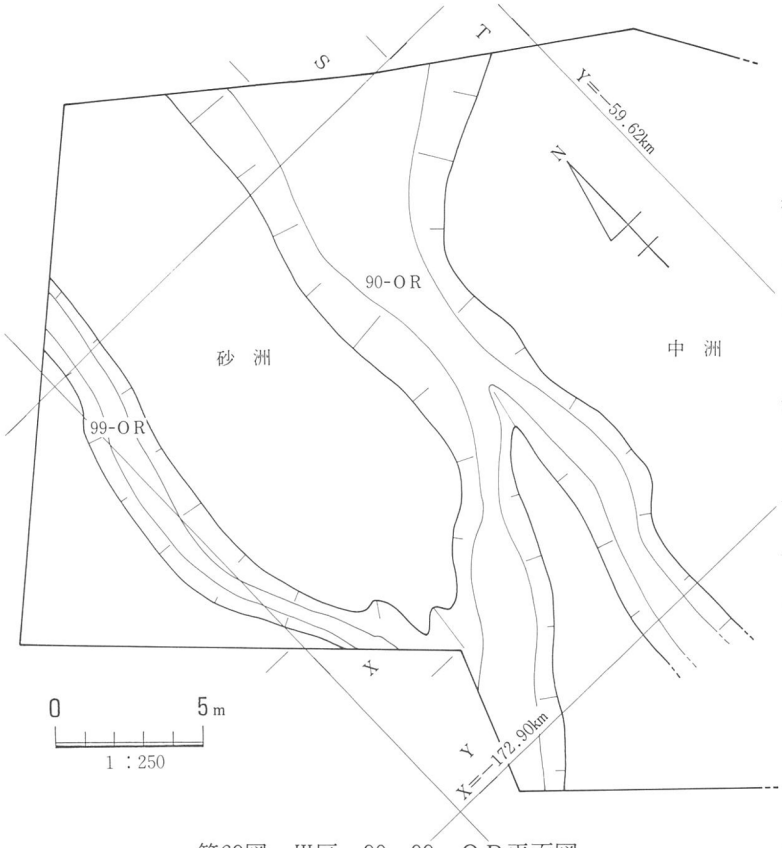
自然流路（第69図）

Ⅲ区北西部に集中的に検出されたもので、十分な記録としてとどめ得なかったが、表記以外にも１～２条あった様である。

中世の埋没後、その北西部を広く覆う粗砂層部分を流れている。一時的な出水に伴う自然流路と思われ、流路内埋土は周辺の灰黄色ないし灰黄褐色系の砂をまきこんでいたため全て面的に掘り下げている途中で気がついたものである。したがって、どの流路も溝上面の幅等は十分に確認できていない。

90－ＯＲ、99－ＯＲは古墳時代後期の流路を検出中に確認した。また92－ＯＲの北側の砂層中にも１～２条の東西に続く流路ないし凹地があったようであるが、これを識別できたのは、流路底近くの砂礫の溜りが検出されてからであり、位置、方向、規模を記録することができなかった。

この付近にある該期の流路は、いずれも古墳時代の遺構検出面を深く抉っており、Ａ19ＹＱ、ＹＲ付近では90－ＯＲが古墳時代前期の91－ＯＲの流路底以下に達していた。流路内には、91－ＯＲ内にあった遺物もとりこまれ、第54図の大甕の破片の一部、須恵質飯蛸壺などが出土し、これに混じって染付の小片が出土している。（藤田）




第69図　Ⅲ区　90・99－ＯＲ平面図

87－ＯＺ（畑）

（第70図）

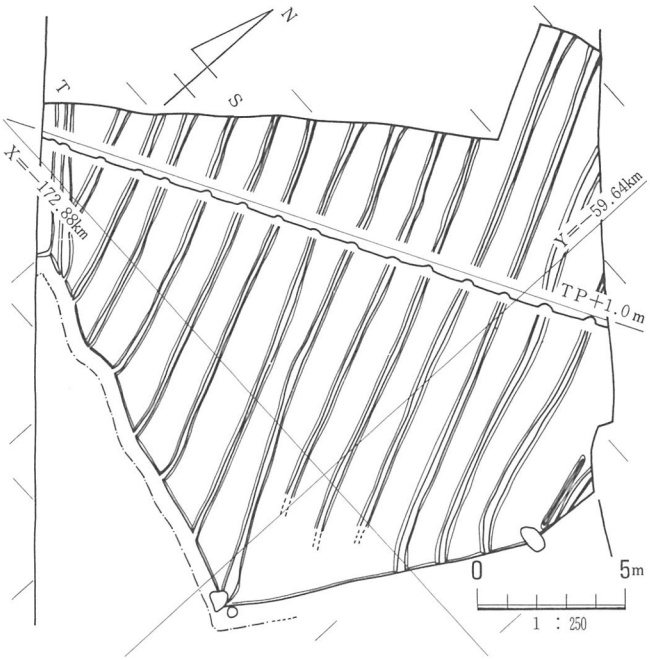
上記自然流路埋没後に作られた遺構である。流路検出面との層界を区別することができなかったが、流路に隣接した部分で約30cm程高い位置に検出された。部分的に粗砂、細砂層の上に、耕土の名残りと思われる黄灰色～灰色の砂質土が薄く広がり、1.3～1.5mの間隔で幅約30cm、高さ15cm前後の細い盛り上がりが、15～16条検出された。南縁から東縁にかけて矩形になり、その外縁の一部には幅50cm強の畔道状の堅くしまった高みが検出されている。

これを覆う埋土は、耕作土の混じった黄橙ないし明黄褐色の細砂である。埋土下部には、部分的ながら著しい鉄分の沈着が認められた。少量の近世陶磁片が出土している。

埋土に耕土と思われる粘質の土を含んでおり、一時的な洪水等で耕土が流され砂にとって代られたと思われる。畔道らしい部分が認められたこと、細い盛り上がりが等間隔で平行に並び、幅広の畝の痕跡と思われることなどから、畑と考えたものである。（藤田）

78・79－ＯＺ

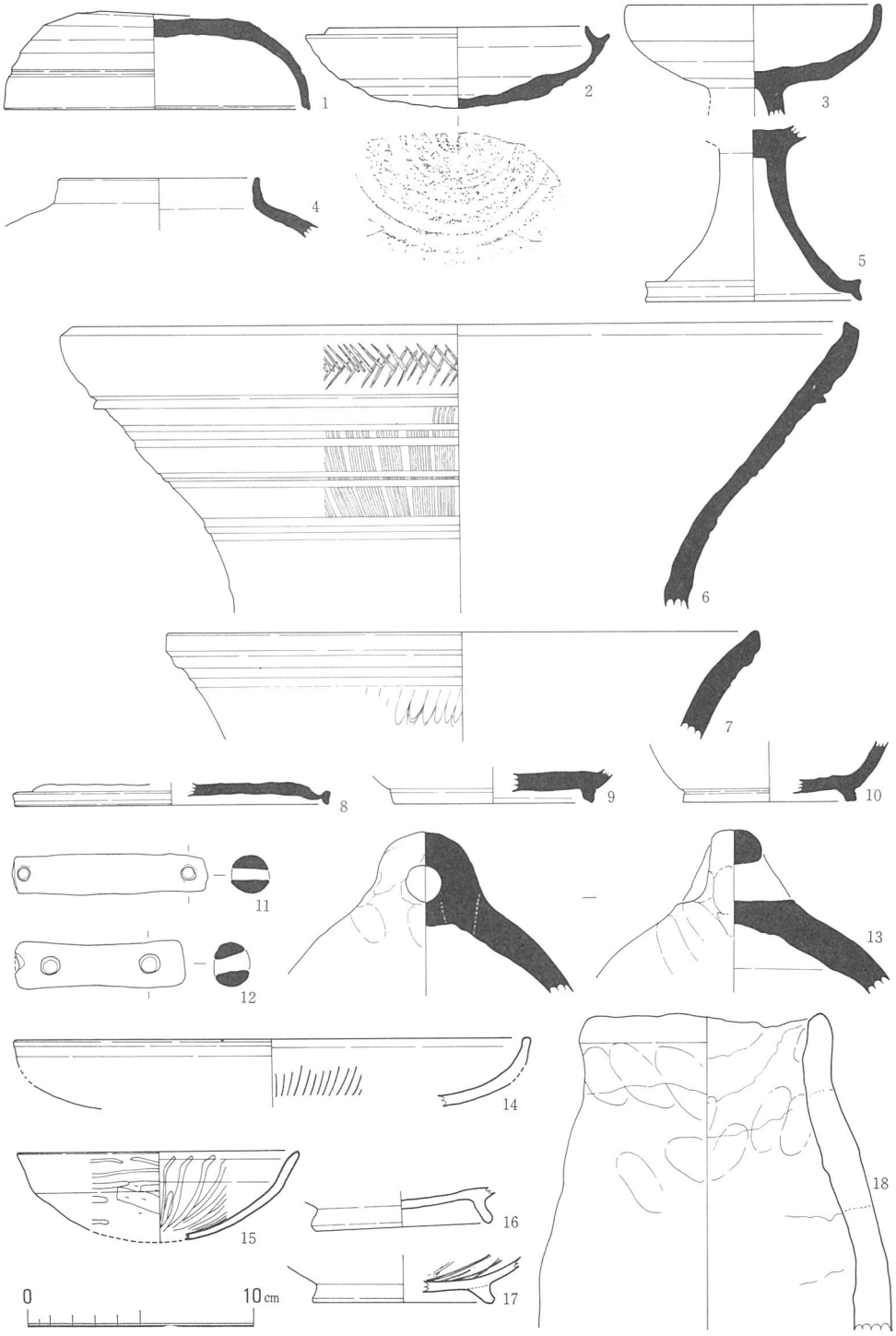
Ⅱ区北西部寄りの南北２地点で検出されている。拡大図は示さないが、南のものはＴＰ＋1.45～1.55mの黄色シルト面で検出され、溝幅15cm前後、深さ２cm前後である。溝の方向はほぼ一定しており、北東―南西方向に長い。北のものは一段低くなったＴＰ＋1.25m前後で検出され、溝幅約15cm、深さ2cm程である。南のものとは方向が違い、東西方向に長い。二者は段違いになっている耕作面と思われる。層位的には87－ＯＺより新しい。（藤田）



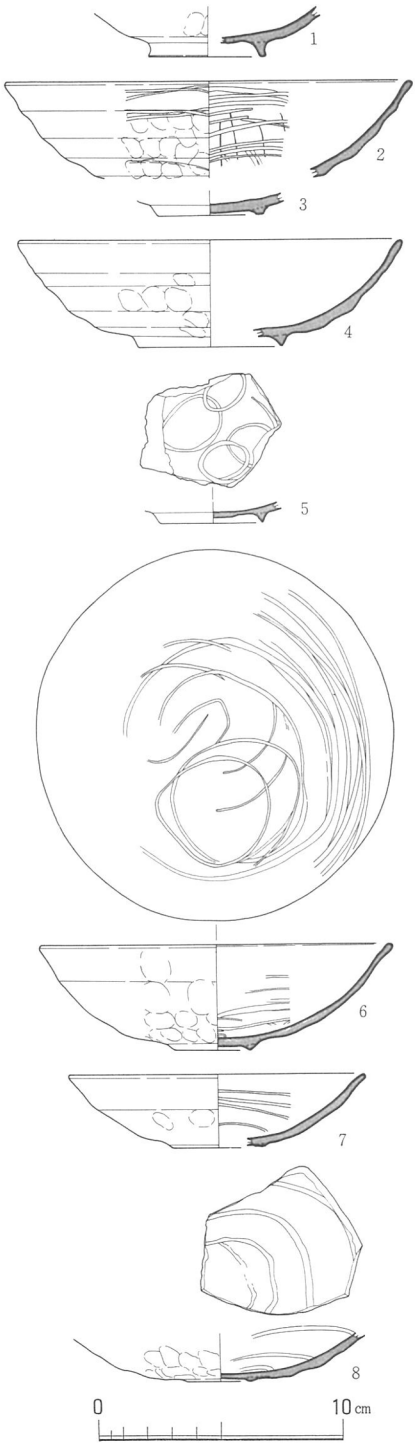

第70図　III区　87－ＯＺ平面図

III区　包含層出土遺物

第71～73図は主に第3～4層とその間に堆積したⅡ区にはない砂層より出土した遺物。包含層の遺物および出土状況は基本的にⅡ区と変わりないが、砂層内遺物は他に比べ残りが非常に良好である。(第71図１・３・５・15・18，第72図６)。第71図は古墳時代後期から平安時代にかけての遺物で(１～13)は須恵器、(14・15・18)は土師器。(６)は大型甕の口頸部。頸部から口縁部へラッパ状に大きく外反し、口縁端部付近ではやや内弯気味、端部は外傾して中央に鈍い凹線を施す。外面の口縁部に綾杉状の文様帯が巡り、頸部との境に断面三角形の沈線を巡らせ、直下に凸帯をつくりだす。頸部上半部に、縦方向の櫛描き文を等間隔に描いた後２条一組の凹線を３箇所に施して文様帯を構成する。内面はろくろナデを施し、頸部の付け根に指頭痕を残す。胎土は５mm以下の白色礫を多く含み、色調は白っぽい。口縁部に緑灰色の自然釉がかかる。(７)は甕の口縁部。外側に粘土を折り曲げて肥厚させ、直下に凹線が２条、波状文１帯が巡る。(１)は坏蓋。天井部上面は回転ヘラケズリにより平坦。口縁部との境に凹線が１条巡り、口縁端部は内傾する面で中央に細い凹線が１条巡る。(２)は坏身。たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。受部も短く外上方にのび、先端は丸い。下から1/5にヘラケズリの後にナデを施し、平行する３本線のヘラ記号を刻む。以上６世紀後半。(３)は無蓋高坏の坏部。底部はヘラケズリの後、丁寧なナデを施す。口縁部は直にたちあがり端部は丸い。(４)は高坏脚部。裾へ向かって緩やかに外反し、端部近くで屈曲して段をつくり、端部は外側に面を持つ。調整は回転ナデ。(11・12)は棒状で中実の土錘で両端付近に１つずつ筒状の穴があく。(11)は45ｇ、(12)は42ｇ。以上６～７世紀。(４)は短頸壺。口頸部は短く直立し、端部は丸い。肩部はなだらかで調整は回転ナデ。(９)は坏底部。直立する高台の端部は内傾する。(10)は壺の底部で

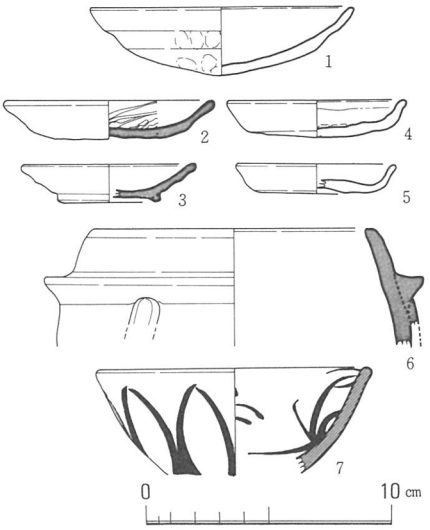



第71図　III区包含層出土遺物実測図



第72図　Ⅲ区包含層出土遺物実測図

高台は外反し底部との境に太い凹線を巡らす。(8)は坏蓋。天井部は水平に近く、端部で下方に屈曲して口縁部との境に段をつくりだす。口縁部は外反気味に短くたちあがり、端部は丸い。調整は回転ナデ。内面に墨が付着し、平坦面を硯として転用している。(18)は蛸壺。下ぶくれの体部と外反気味の口縁部との境は紐の装着部としてくびれる。内外面ともに粘土紐をまきあげた痕を顕著に残すが、外面の調整が指痕を残し雑なのに対し内面は非常に丁寧にナデを施す。(13)は釣鐘形の蛸壺。紐通しである環状部は体部に差し込まれ、外面は繋ぎ目を消すための指ナデ痕が残る。内面は丁寧なナデ。焼成はあまい。(14)は皿。体部は外反し、口縁部付近は強いナデにより屈曲させ、口縁部をたちあがらせている。端部は内面に折り返し、端面は平坦。土器表面の剝離が著しく詳細はわからないが、内外面にヘラミガキが、内面には等間隔の放射状暗文が観察できる。(15)は碗。底部は丸く、体部は外反するが口縁部との境で屈曲し、外反度は緩やかになる。端部は内面に細く強いナデを施し、断面三角形になるが先端は鈍角。外面底部から体部に手持ちヘラケズリを施した後ヘラミガキを口縁端部付近まで施す。内面は底部から体部中程までヘラミガキを、口縁部にはナデを施した後、放射状暗文を口縁端部付近まで等間隔に描く。焼成は堅固。(8～15)は7～8世紀。(16・17)は黒色土器の底部、(17)はA類で(16)がB類。(17)は外反し端面が平坦に近いしっかりした高台を持つ。外面は底から体部に



第73図　Ⅲ区包含層出土遺物実測図

ヘラミガキを、体部は分割して施す。内面は炭化物が厚く付着し、内面にヘラミガキを底面にジグザグに体部は分割して施す。10世紀前半。(16)の高台は上方で屈曲して外反し、端部は丸い。内外面ともに底面は乱方向にヘラミガキを施す。10世紀後半。第72図は12～14世紀前半の瓦器碗を古い順に並べた。時期を追って高台径は4.9→2.0cmに、口径は16.8→12.3cmに小型化する。(1)はローリングを受けヘラミガキ、暗文は不明瞭だが、断面台形の高台はこの中で最も高くしっかりしている。(2)は内面にジグザグ状暗文を施した後、顕著なヘラミガキを内面全面と外面の下半部まで施す。(3)は高台から(2)と同時期と考える。(4)はローリングのため観察不可能だが外面にもヘラミガキが残る型式。(5)は内面に連結輪状暗文を施し、高台は断面がつよいナデにより三角形を呈す。(4)と同時期。(6)は今回の調査で唯一の完形瓦器碗。高台の断面はかまぼこ状になり、外面にはヘラミガキが全く見られず全面に指頭痕を残し、内面の暗文は粗雑になった圏線状のヘラミガキと連続して複雑な螺旋状になる。(7)の内面のヘラミガキは渦巻き状。(7・8)の扁平な高台は消滅直前のもの。第73図はその他の主な中世の遺物。(6)は瓦器の三足釜で口縁端部は平坦な面、足は短く突出した鍔の直下から体部にくっつき、畿内北部を中心に分布する型式と思われる。(2・3)は瓦器皿。(2)は外面の体部にナデを1条施し、口縁部は肥厚し端部は丸い。底部に指頭痕を残す。内面はジグザグ状の暗文と粗雑なヘラミガキを施す。(3)は外反する断面台形の高台を持つ盃状の皿。口縁端部は肥厚し丸い。焼成はあまい。(4・5)は土師器小皿。共に口縁はやや外反し端部は丸く、体部は1条のナデでつくりだす。(1)は土師器中皿。外面口縁部はナデ、体部に指頭痕を残し、顕著な調整痕は認められない。内面はなめらか。(7)は龍泉窯系の青磁碗。明緑色の釉薬がかかり、外面に蓮弁の文様を有する。蓮弁の鎬は退化し、内面に草花文を描く。以上13～14世紀。

(蜂屋)

瓦（第74図）　Ⅲ区の近世～現代の形成層および遺構から出土した瓦である。(1・2)は海側の近世流路90－ＯＲ・99－ＯＲの合流点付近から出土した丸瓦である。(1)は凹面に布目痕、凸面に縄目タタキ痕を有するもので、一方の端縁が遺存している。この端縁は

第74図　Ⅲ区　90・99－ＯＲおよび近世遺構出土瓦拓影・実測図

成形の際、荷重がかかり外弯したと思える点から、広端縁にあたると考える。端縁凹面は粘土をたした後、雑な面取りをくわえるが、下地の布目痕が観察される。（２）は（１）より小振の丸瓦で、凹面に細かい布目痕、凸面に縄目タタキを施している。両側縁凹面に面取りを施すが、側面の一方は不調整である。端縁凹面にも軽くヘラケズリをくわえている。（３）は第２層出土の巴文軒丸瓦で、巴文は右巻きで、尾はやや長く、周囲に16個の珠文を配している。裏面に丸瓦部接合のためのキザミ目がみられる。（４）は現代溝85－ＯＳ出土の巴文の軒丸瓦で、巴文は右巻きで、尾は太く短い。やはり16個の珠文を配していたと思われる。（５）は第２層出土の丸瓦片で、玉縁近くに径1.5cmの穴を凸面から凹面方向に穿っている。磨滅のため調整は不詳だが、凸面にヨコ方向のナデがみられる。

（黒田）

# 第Ⅳ章　ま　と　め

今回の脇浜遺跡の調査は、ＴＰ＋10m前後の段丘からＴＰ＋1.5m前後の海浜部近くまで地形の変化を追って縦断的に観察した形になり、地形の推移、遺跡の推移に関して、多くの貴重な成果を得た。その成果については第Ⅲ章に記してきたが、主に解釈に関わる部分で、調査担当者内部で統一的な見解を得ることができず、将来的な課題として残す点も少なくなかった。本章でこの点に触れつつ、調査のまとめにしておきたい。

○地形の推移、遺跡の推移

今回の調査で検出された確かな遺構は、古墳時代の掘立柱建物と中世の性格不明のピット群などわずかなものであったが、出土遺物には縄文晩期以降各時代のものが、量の多少はあるものの、連続的にみられた。そのほとんどは段丘下で検出されている。

段丘上は近現代の土取りによって、中位段丘[(1)]のシルト層下端まで削平されていたため、全面掘削を中止したものであるが、調査区南縁の近木川右岸自然堤防上でナイフ形石器、サヌカイト剝片等が採集されており、既往の調査例も考慮すると、この段丘上の各時期の遺構、遺物があったことは十分想定される。

段丘下の遺物は少なくとも縄文晩期まで遡ることができる。ここにはＴＰ＋３～２mの砂堆が段丘直下から約100m程形成されている。この砂堆は中位段丘に連なるＴＰ±０～－１mの礫層を基盤にして堆積したもので、古墳時代の建物、中世のピット群は全てこの砂堆の上に築かれており、砂堆のない部分と際立った対称を示している。

砂堆の上面は一部削平を受けた形跡がうかがえ、その後現在までに0.5～１mの堆積がみられる。この層中には古墳時代以降、中・近世までの遺物が混在して含まれ、局部的に検出されるピット群はあるものの、全体として顕著な遺構はみられない。

砂堆から浜側は古墳時代には河口部の様を呈し、奈良～平安期には91－ＯＲは埋没して、沼状の湿地部を形成している。より海側に浜堤が形成され、陸化が進んだ結果であり、南側から注ぐ流路はこの時点で失われている。

沼部分はその後相当期間、湿地を形成していたらしく、シルト層を覆う埋土はほとんどなく現在の耕土になっていた。ここから浜側は中近世以降の厚い砂層が現耕土下まで厚く覆っており、近世の一時的流路が複雑に流れていた。耕作地として開かれることになったのは、現代からあまり遡るものではなかったと思われる。

○製塩土器について

製塩土器は全体で約480個体を数える。その大半はＡ24ＨＷを中心とした91－ＯＲ左岸部分の土器溜りから出土している。この土器溜りは飯蛸壺の他、多量の壺・甕などの土師器を含み、廃棄された土器群と考えられるものである。遺物の出土状態、砂堆の様相等から今回の調査はこの期の遺跡の北端部をわずかに検出した可能性が強く、現状で遺跡内容を云々することは危険であるが、製塩土器とともに炭・焼土・焼けた礫などがみられ、日常的に潮がさしてきた地理的条件も加え本遺跡に近接した調査区南縁付近で製塩作業が行われていたと想定して大過あるまい。

岸和田市から泉佐野市にかけて、製塩土器が出土する遺跡が少なくない[(2)]。内容の不明な１・２を除いて、全て現在の海岸線から２～３km離れた中・低位の段丘上の遺跡で出土している。これまで海浜部の該期の遺跡が未確認であったこともあって、段丘上の遺跡の製塩土器の型式分類以外の検討は避けられがちであったが、ようやく製塩遺跡の実態にせまれる段階に近づいたようである。

ただ製塩遺跡としては今回の出土量は極めて貧弱であり、また伴出土師器等からは長期にわたる土器溜りの様相でないにもかかわらず、この地点出土の製塩土器は変化に富み、３型式10数タイプがみられる。既知の段丘上の製塩土器を出土する遺跡と本遺跡との関わり、本遺跡の製塩土器の様相についての若干の考察は別に稿を起こしたいと思う。

○蛸壷形土器について

総個体数約565点の蛸壺形土器が出土しており、形態的にはいわゆるコップ形と釣鐘形に大別できる。コップ形のものはいずれも土師質で約490点あり、内訳は古墳時代前期のもの約470点、中世のもの約20点である。一方釣鐘形のものでは、須恵質が古墳時代後期で約65点、土師質はいずれも中世の包含層からの出土で約10点を数える。

そして数の多い古墳時代前期の蛸壺形土器は、本文にも示したが法量、形態、調整という観点から分類が可能である。その中で大形の蛸壺形土器については、体部外面の磨滅や、底部穿孔部分の紐ずれ等から蛸壺と判断したものも少なくない。これらについては今後他の遺跡での状況と比較して検討していきたい。

今回、古墳時代前期・後期・中世のいずれの蛸壺形土器も、調査区全体から満遍なく出土した。蛸壺形土器は、和泉市池上遺跡[(3)]や神戸市玉津田中遺跡[(4)]等でみられるように、紐に数十個とりつけられたものが一括して廃棄されたと考えられる状況で出土することがある。その場合、ほとんど同じ法量、形態のものが他の土器を伴わずに出土するあり方を呈する。

本遺跡、特に91－ＯＲ肩部では、法量（特に小形の飯蛸壺の中での法量）や技法にバリエーションが多いという点、また他に土師器や製塩土器を伴っているという点で、先にあげた遺跡の廃棄の状況とは異なっていると言えよう。

では、このバリエーションをどう考えるかだが、91－ＯＲ肩部出土をはじめとする飯蛸壺は、布留式の古い段階を中心とする時期の土器と共に出土しており、今回の調査所見だけからでは、そのまま時間差の反映として解釈していくことは難しい。今後は他の遺跡でのあり方も検討する必要があるが、この差は飯蛸壺を使用した集団の差を示す可能性も考えている。

○101－ＯＢについて

Ⅲ区南東半の砂堆上で検出されたピット群は今回の調査では比較的まとまりをもつ柱穴群で、埋土等から古墳時代後期に属すると判断した。ただ、この遺構の復元、その意義の解釈等については担当者では十分統一できず、本文中では一案を示した。

その主旨をまとめると、この建物を間取り３間の北庇を持つ２×２間の建物（101－ＯＢ）と考え、海の方向に向かって出入口をもつこと、真北を意識した建物と考えたこと、少なくとも調査区内には「塀」と考えた構造物以外の建物が全くみられないこと、日常生活に伴う該期の遺構としては大きな面積を持っていること等から、特異な祭祀的な建物址と考えようとするものである。

これに対する見解は、まず101－ＯＢの想定そのものを懸念することに象徴される考え方で、柱筋に乱れがあり過ぎること、「塀」とした施設についても、上層（第４層）の堆積状態、含まれる遺物の状態から、当該期の面が削平されている可能性が強く、検出遺構の深さからみて、現状で関連するピットが無かったと断定できないこと、したがって遺物の多少も不安定な論拠にしかならないことなど「塀」の想定そのものに問題があり、仮にそれぞれの群のピットがまとまる遺構になるとしても、ピット群相互の関連については、それぞれの軸線にかなりズレがあり、一連の施設とするには難があること、本調査区が該期の脇浜遺跡のどのような部分にあたるか不明であり、第４層の形成に関わる遺構面削平があって１棟しかないとは言いきれないこと等から、さきの解釈の論拠の全てに問題があり、仮説を重ねた前の解釈に対して慎重を期する意見も少なくなかった。

○第４層について

Ⅱ区からⅢ区に続く砂堆を覆う第４層およびその上層の第３層は、黄灰色・暗褐色系の混砂・礫のシルト質の堆積層である。それぞれ３ないし２層に細分され、全体的には北西

方向に傾斜しながらも平坦な層序を示す。層中に含まれる遺物は古代・中世の瓦などを含め古墳後期以降各期のものが混在する。第3層中には確実に染付等が含まれ、第4層との時代差を認めることができるが、第4c層ないしその下部の砂層が高いII区北西端付近では、何らかの混在の可能性があるものの、やや新しい時期の遺物が微量認められ、各層の時代を確定しきれない面もあった。

第4層はこれまで示唆してきたように第9層上面を削って堆積している可能性があり、上下位の別なく検出される遺物からみれば、6世紀代から15世紀代にかけて自然に堆積した層とは考えがたく、層厚を増す過程を通してか、時代的に限られるものかは不明であるが、耕作人等の手の加わった層と考えられる。これは第3層についても同様である。(5)

第II章で記した様に今回の調査区は遠藤氏想定の近木庄(6)の一画に近接し、基本的に15世紀以前の遺物に限られる第4層中に条里等の関係遺構が検出される可能性はあった。例えばIII区南東部検出の犂溝とした小溝群は関連する可能性がないとは言えない。しかし積極的な証左に挙げられるものでもない。プラント・オパール分析結果によると耕作地とすれば畑地であったろうとする説を補強するものでしかない。

第4層の層厚をやや詳しくみれば、現在の畦畔に重なる部分で少しずつレベルが下がっており、現地形と符合する。このことは第4層の堆積を通して、少なくとも第3層の形成期には想定近木庄の条里割とは異なった、現地形に通じる地割りがすでに出来ていたとも考えられ、逆にこのことによって、第4層の形成が15世紀以前と想定してよいのかどうかの問題におよぶことにもなる。いずれにしても第4層の解釈もまた、将来的課題として譲らねばならない。

(藤田・禰宜田)

註

1．千地万造　第II章註1書による。

2．この種の遺物として、岸和田市土生遺跡、泉佐野市湊遺跡、三軒屋遺跡などが著名である。

3．(財)大阪文化財センター『池上遺跡　第2分冊　土器編』(1979)

4．兵庫県教委山本三郎氏の御教示による。

5．例えば第71図6に示した須恵器は、II区からIII区にまたがって最大60mの範囲に5cm大の破片となって計10片程が散らばっていた。一帯は平坦な堆積を示し、自然の営みによって散らばったとは、単純に考え難い。

6．遠藤　巌　第II章註5b書に拠る。第4図参照

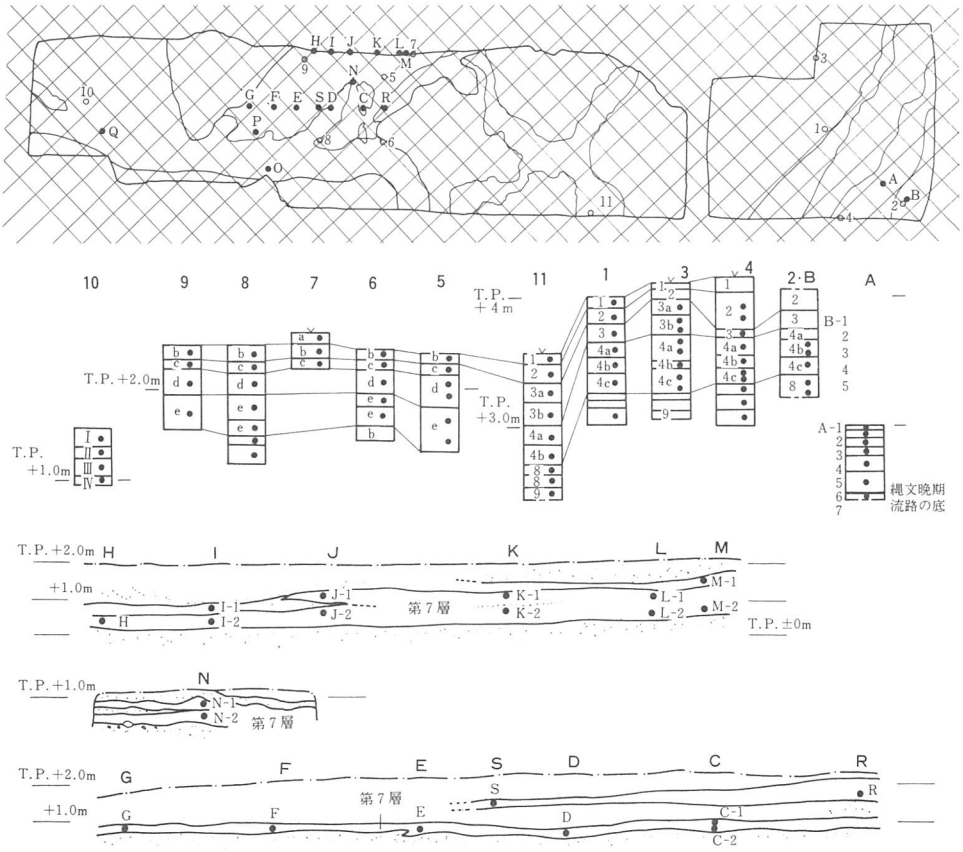
# 付　　論

分析試料採取位置

今回の調査では、プラント・オパール分析と花粉分析を行った。

プラント・オパール分析の試料は11箇所で68点を採取した。その内訳は、II区各層について４箇所(１～４)30点、III区中世沼の埋土４箇所(５・６・８・９)22点とその上層を１箇所(７)３点、III区北西部と南西部それぞれ１箇所(10・11)13点である。

一方花粉分析の試料は22箇所で36点を採取した。内訳は、II区縄文時代晩期流路の埋土とそのベースを１箇所(A)７点、II区南西部１箇所(B)５点、III区古墳時代前期流路12箇所(C～H・I－２・J～L・M－２・N－２)16点、III区古墳時代後期流路５箇所(I－１・N－１・M－１・S・R)５点、III区中世土器包含層３箇所(O～Q)３点である。




第75図　II区・III区分析試料採取位置図

# （Ｉ）脇浜遺跡をとりまく環境の古生態学的検討

総合科学株式会社

はじめに

この報告は、遺物が検出された地層や、その上下の地層から採取した土の試料を使用して花粉化石分析及び珪藻化石分析を行い、古生態学の立場から遺跡周辺の古植生や農耕の状況、及び地層の堆積環境等について検討したものである。

１．試　料　採　取

試料を採取した地層と数量は、上位から次のとおりである。中世（15世紀頃）３試料、古墳時代後期～中世５試料、古墳時代後期５試料、古墳時代前期16試料、縄文時代晩期６試料、縄文時代晩期の遺構以前１試料、計36試料。

２．分　析　結　果

２－１．花粉分析結果

全試料に多量の花粉および胞子が含まれており、そのうち代表的なものについては第76図に示した。分析結果をみると、全試料とも木本花粉ではマツ属とアカガシ亜属が圧倒的に優勢である。Ａの試料の木本花粉では、アカガシ亜属が優勢である。マツ属をみるとＡ－７で優勢であったものが、Ａ－６で急減し、Ａ－５ではさらに減少している。しかし、Ａ－４～Ａ－１と上位の地層になるにしたがって徐々に増加している。シイノキ属ではこれと逆の変化がみられる。

草本花粉のヨモギ属とイネ科についてみると、下位層では少なく上位層で多い。イネ属はＡ－４から上位で出現しはじめ、特にＡ－２、Ａ－１が多い。

Ｃ～Ｑの試料の木本花粉は、マツ属、アカガシ亜属が高率で出現しているが、両者の消長の傾向は逆である。このほかにヤマモモ属、シイノキ属などの常緑広葉樹、ツガ属、スギ属などの針葉樹およびコナラ亜属、ニレ属やケヤキ属などの落葉広葉樹が連続して出現している。草本花粉ではイネ科とヨモギ属が多く、イネ属も全試料から出現している。

第76図のＣ－１～Ｎ－２、およびＩ－１～Ｑはそれぞれ下位層および上位層から採取したものである。しかし、花粉の出現状況の不連続性から、むしろＩ－１とＪ－１の間が真の地属境界と考えた方が妥当である。

Ｍ－１、Ｒ、Ｓの試料からは出現種類が少ないが、木本花粉はマツ属とアカガシ亜属のほかにヤマモモ属も高い出現率を示している。草本花粉はヨモギ属が非常に多く、イネ科

とイネ属も比較的高い値を示している。

Bの試料では、木本花粉はマツ属がB－4～B－1できわめて高率である。しかし、最下位層のB－5ではマツ属は少なく、ツガ属やアカガシ亜属が優勢である。ヤマモモ属も10%前後の割合で出現している。

2－2．珪藻分析結果

珪藻分析の結果、B－1～B－5、M－1・R・S、および旧自然流路の堆積層のうち上半部に相当するA－1～A－4の試料からは、珪藻が全く検出されなかった。このことは、その地層がもともと珪藻が生育できるような水底の堆積物ではなかったか、または化石として保存されなかったかのいずれかである。一般に粘土、シルト中ではこれら化石の保存は良いが、砂質、礫質層中では化石として保存されにくい。出現した珪藻化石は、第1表－1～第1表－2に示すとおりである。

C－2～Qの試料からは、中心型類2属4種類、羽状類24属72種類、合計26属76種類が検出された。A－5～A－7の試料には中心型種類は全く含まれておらず、羽状類8属13種類が検出された。注目できることは、湿地堆積物のC－2～Qから検出された全76種類中40.8%にあたる31種類が汽水種又は海産種であったことである。その他のものは全て淡水種であった。また、A－5～A－7の試料では、海産種は1種検出されたのみで、他は淡水種であった。

検出された海産種の主なものは、Cyclotella striata, Cocconeis scutellum, Caloneis westti, Diploneis interrupta, Navicula yarrensis, N. elegans, Tracyneis aspcra, Nitzschia plana, N. scalrisなどである。

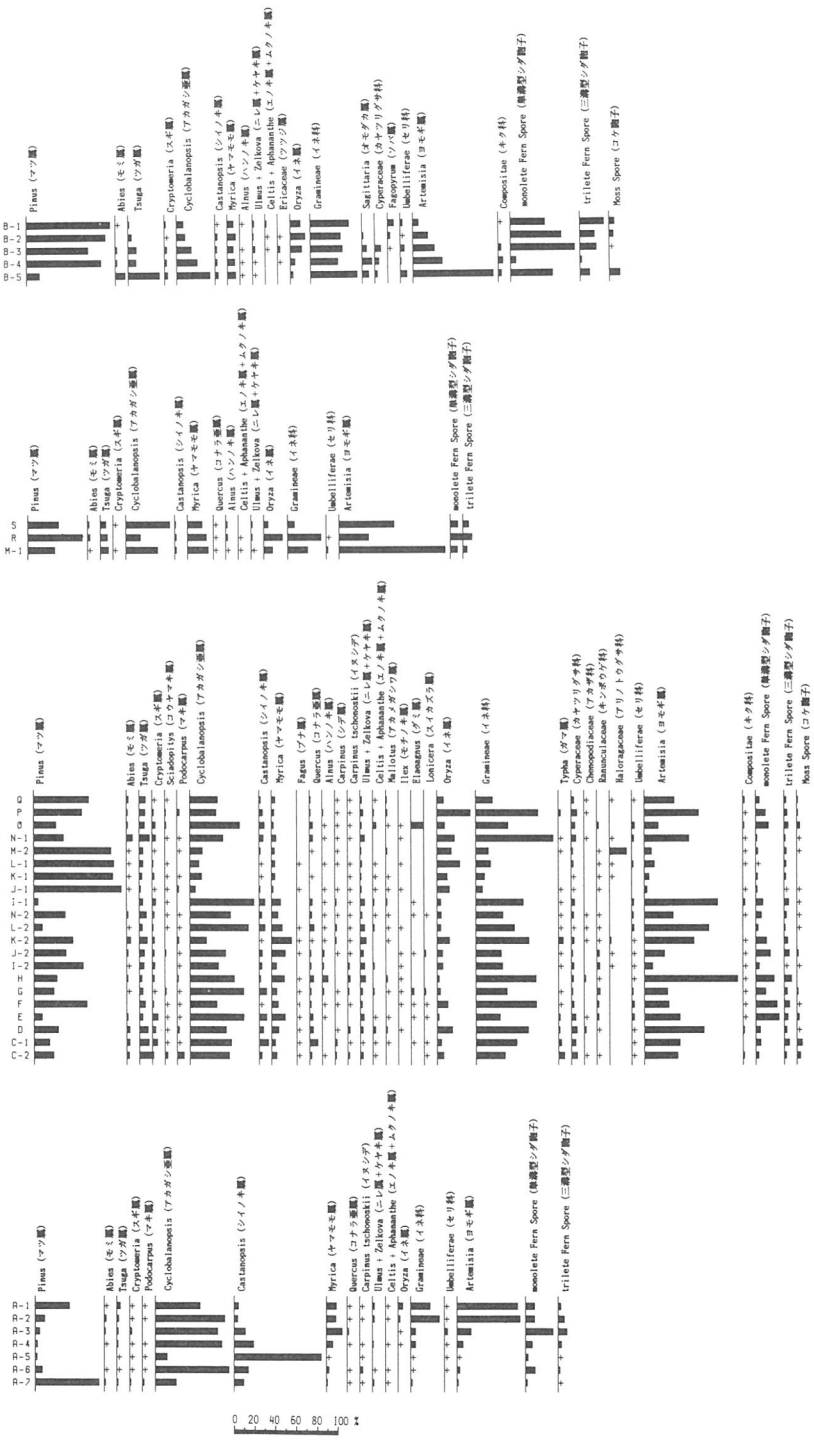
汽水種の主なものは、Coscinodiscus lacustris, Mastogloia smithii, Rhopalodia gibberula, Bacillaria paradoxa, Nitzschia tryblionella, N. hungarica, Campylodiscus echeneis などである。

淡水種の中で、Eunotia monodon var. tropica, E. formica var. sumatrana などのEunotia属9種類およびPinnularia属の4種類などは、塩類の特に少ない湿原水中に好んで生育するものである。また、上記のE. monodon var. tropica, E. formica var. sumatrana などは南方系のものである。

3．考　　察

3－1．脇浜遺跡周辺の古環境、植生、及び農耕

(1) 地点によって多少の差はあるが、カシ類、シイノキ、ヤマモモなどの暖温帯常緑樹




第76図　主要花粉・胞子のダイアグラム

Centrales (Centricae) 中心型類

| 番号 | 種名 ＼ 試料番号 | C・1 | C・2 | D | E | F | G | H | I・2 | J・2 | K・2 | L・2 | N・2 | I・1 | J・1 | K・1 | L・1 | M・2 | N・1 | O | P | Q | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Coscinodiscus lacustris Grum. | | + | ⊕ | | + | | | + | + | + | + | + | ⊕ | | | | | | | | | ※ |
| 2 | Cyclotella striata (Kütz.) Grum. | | | | | | | | + | + | | | + | + | | | | | | | | | ※ |

Pennales (Pennatae) 羽状類

| 番号 | 種名 ＼ 試料番号 | C・1 | C・2 | D | E | F | G | H | I・2 | J・2 | K・2 | L・2 | N・2 | I・1 | J・1 | K・1 | L・1 | M・2 | N・1 | O | P | Q | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | Synedra ulna (Nitzseh) Ehr. | | + | ⊕ | | + | + | + | + | | + | + | | | + | + | + | | + | + | + | + | |
| 4 | Eunotia monodon Ehr. var. tropica Hust | | | + | | | | | | | + | | | | | | + | + | | | + | | |
| 5 | E. formica Ehr. var. sumatrana Hust | | + | + | | | | | | | + | | | + | + | + | + | + | | | | | |
| 6 | Cocconeis scutellum Ehr. | | | | | | | + | | + | | + | | | | + | | | | | | | ※ |
| 7 | Neidium iridis (Ehr.) Cleve | | + | + | | | | | | | | | | | | | + | + | | | | + | |
| 8 | Diploneis smithii (Breb.) W. Smith | | + | + | | | | | + | + | + | | | + | + | + | + | + | + | | | + | ※ |
| 9 | D. fusca (Greg.) Cleve var. pervasta (Pant.) Hust | + | | | + | | | | | | + | | | | | ⊕ | | + | + | | | + | ※ |
| 10 | Diploneis interrupta (Kütz.) Cleve | | | | | | | | | | | | + | + | | | | | | | | | ※ |
| 11 | Navicula yarrensis Grum. | + | + | + | | + | + | + | + | + | + | ⊕ | + | + | | | | | + | | | | ※ |
| 12 | N. elegans W. Smith | + | + | ⊕ | + | + | + | + | + | + | + | | + | + | | | | | + | + | + | | ※ |
| 13 | N. peregrina (Ehr.) Kütz. | | + | | | + | + | + | ⊕ | | | + | + | | | | | | | + | | | ※ |
| 14 | Pinnuleria maior (Kütz.) Cleve | | + | | + | + | | | + | | + | | | | | ⊕ | + | + | + | | | + | |
| 15 | Amphora ovalis Kütz. var. libyca (Ehr.) Cleve | + | + | + | | | | | | + | | | + | + | | | | | | + | + | | |
| 16 | Cymbella tumida (Breb.) V. Heurck | | | + | | | | + | + | | + | | | | | + | + | | | | | | |
| 17 | C. lanceolata (Ehr.) V. Heurck | | | | + | + | | + | | | + | | + | | | + | | + | | + | | | |
| 18 | Gomphonema augur Ehr. var. gautievi V. Heurck | | | | | | | + | | | + | | + | | | | + | | | | + | | |
| 19 | Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Miill | | + | + | | | | + | + | + | + | + | | + | + | + | | | + | | + | + | ※ |
| 20 | Nitzschia plana W. Smith | + | + | ⊕ | | + | | + | + | | + | + | | + | | | | | | + | | | ※ |

(注1) ＋は存在を、⊕は多いことを示す。 (注2) 試料番号の１は上部、２は下部で採取したことを示す。 (注3) 摘要の※は海水性、汽水性を示す。

第１表－１ 珪藻化石群集（試料番号Ｃ～Ｑ）

Pennales (Pennatae) 羽状類

| 番号 | 種名 ＼ 試料番号 | A・1 | A・2 | A・3 | A・4 | A・5 | A・6 | A・7 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Synedra ulna (Nitzsch) Ehr. | | | | | | | + | |
| 2 | Eunotia monodon Ehr. var. tropica Hust. | | | | | | ⊕ | + | |
| 3 | E. valida Hust. (?) | | | | | + | | | |
| 4 | E. flexuosa Kütz. | | | | | | + | | |
| 5 | E. praerupta Ehr. var. bidens Grum. | | | | | | + | ⊕ | |
| 6 | Stauroneis phoenicenteron Ehr. | | | | | + | | | |
| 7 | S. acuta W. Smith | | | | | + | | | |
| 8 | Navicula americana Ehr. | | | | | | + | | |
| 9 | Pinnularia maior (Kütz.) Cleve | | | | | ⊕ | + | | |
| 10 | Cymbella lanceolata (Ehr.) V. Heurck | | | | | + | | + | |
| 11 | Nitzschia scalaris (Ehr.) W. Smith | | | | | | + | + | ※ |
| 12 | Gomphonema acuminatum Ehr. var. coronata (Ehr.) W. Smith | | | | | | + | | |
| 13 | G. subtile Ehr. var. sagitta (Sehum.) Cleve | | | | | | + | | |

(注1) ＋は存在を、⊕は多いことを示す。 (注2) 摘要の※は海水性、汽水性を示す。

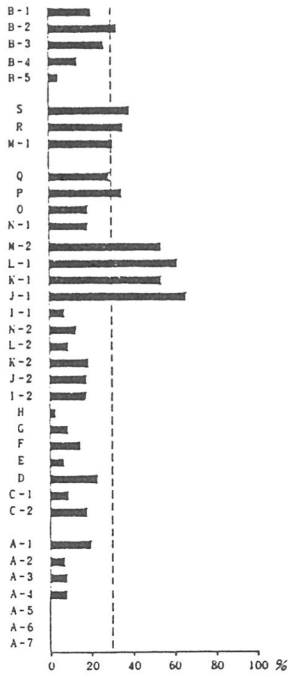
第１表－２ 珪藻化石群集（試料番号Ａ１～Ａ７）

の花粉がすべての試料から出現している。このことから、当時の気候は全体として現在のそれとほぼ類似していたと考えられる。

(2) 各試料からマツ属が出現している。A－7からA－5へかけてマツ属花粉は急減しているが、A－5を境として上部へ向かって漸増している。これと全く逆の現象がシイノキ属花粉に認められる。また、イネ科、ヨモギ属等の草本花粉もA－5付近から上部へ向かって漸増する傾向がある。これらのことからみると、A－5付近に古環境の変化、あるいは人と植生とのかかわり方の移り変り、といったものがあったのではないかと推定できる。

(3) A－5の時代より新期のA－4～A－1及びその他の全試料では、いずれもヨモギ属やイネ科の花粉の出現率が高い。このことは、A－5の時代以降これらの草本が生育できるような場所（高木や低木が比較的少なく、オープンな場所）がかなり広く存在していたことをものがたっている。

(4) 中村（1977）は、過去の稲作の規模を推定するため、1試料中のイネ科全花粉に対するイネ属花粉の割合、すなわちOryza（イネ属）／ΣGramineae（イネ科）「イネ花粉比率」を提唱している。これが30%を超えると、かなり集約的稲作が行われていたとしている。脇浜遺跡のイネ花粉比率をみると、J－1、K－1、L－1、M－2、P、R、S、M－1、B－2の9試料で30%を越えている。試料により差はあるが、A－5の時代より新期になると、この遺跡付近でかなり集約的な稲作農業が行われるようになったことがうかがえる。



第77図　イネ花粉比率

(5) B－3～B－5試料からはソバ属の花粉が出現している。ソバ属は花粉生産量が少なく、また虫媒花であることから、多量の花粉が遠距離を移動することは少ない（山中・中村、1981）。本調査ではソバ属花粉が出現したのは上記3試料のみであるが、当時この遺跡のごく近いところでソバが栽培されていた可能性がある。

3－2．地層の堆積環境

(1)　C－2～Q試料から出現した珪藻のうち、汽水種または海産種は概して地層の下部（古墳時代前期に相当）に多い傾向がある。これらの試料を採取した位置の標高は約ＴＰ＋1.0m～約ＴＰ＋0.3mである。

(2)　旧自然流路において、海産種が出現した最下位層のＡ－７（縄文時代晩期の遺構以前に相当）の標高は約ＴＰ＋2.4mである。

(3)　(1)及び(2)のことから、これらの地層の堆積環境については次のように考えられる。現在標高ＴＰ＋1.0m～ＴＰ＋0.3mに存在している地層は大阪湾に注ぐ旧自然流路の河口部で、潮汐の干満の影響をうけながら堆積を開始したものと推定される。そのような場所も、河川から供給される堆積物によって徐々に埋め立てられて、海水または汽水に被われなくなり、ついには河川水のみをただよわせた小規模な沼沢地へと変化していったと考えられる。地層の下部にNavicula属、Nitzschia属などの海産種が多く出現し、上部にEunotia属、Pinnularia属などのように、塩分の特に少ない湿原水中に好んで生育する種類が出現していることがこれを証明している。しかしＡ－７で１種類の海産種の珪藻が出現したことと、当時海水面がその高さに存在していたということを直接結びつけるのは若干問題がある。

縄文前期の前半（約5,000年前）を最盛期とする２～５mの上昇（縄文海進）があり、約4,000年前以降次第に海面が低下して、約3,000～2,000年前には海面は現在より約３m低かった、という証拠が各地にある（井関1981）。

これらのことから当時約ＴＰ＋2.4mの高さに海面が存在していたとは考えにくく、むしろ、これらの出現化石はさらに古い時代の地層（大阪層群中の海成粘土など）から供給されたと考えるのが妥当であろう。

Ａ－４～Ａ－１、Ｂ－５～Ｂ－１及びＭ－１、Ｒ、Ｓなどを含む地層は、出水期の河川のはん濫などによってもたらされた可能性が強い。

文　献

中村　純　1977：稲作の起源をさぐる＝花粉分析。数理科学170　41－46

中村　純・山中三男　1981：ソバの花粉の散布に関する研究。古文化財に関する保存科学と人文・自然科学、昭和55年度年次報告書、83－88

井関弘太郎　1981：完新世の海面変動、日本の第四紀研究
日本の第四紀研究会編・東京大学出版会、89－97

# （II）脇浜遺跡におけるプラント・オパール分析

藤　原　宏　志

脇浜遺跡は貝塚市脇浜一～三丁目に所在する縄文時代晩期から近世にいたる複合遺跡である。この遺跡は大阪湾岸にあり汀線まで約500mに位置し、標高２～３mの砂性堆積物の上に立地している。

本稿では当該遺跡における栽培植物の有無、水田その他の圃場の有無について分析的に検討した結果を報告する。

## １．分析方法

プラント・オパール分析は同定量分析方法（ガラスビーズ法）により行った。同法の詳細は別報を参照されたい。

## ２．試　料

分析用土壌試料はピット壁面から100cc採土円筒を用いて採取した。

試料の採取地点は別図に示した通りであり、一次採取は'85年12月、二次採取は'86年１月に行った。

## ３．分析結果

各地点の分析結果は図に示す通りである。

## ４．分析結果および考察

（一次採取試料）（１～４）

(1)　イネ（Oryza sativa）は下層土を除き、おおむね各層から検出される。しかし、量的には少なく水田が営まれたとすれば各層とも比較的短期間であろう。２地点を除きタケ類が多いことをみると、畑として利用された可能性もある。

(2)　１、３、４地点はタケ類が多い。おそらく周辺に樹林が進出しており、その下床植生としてササ類が繁茂していたことによるものであろう。

(3)　２地点は他の地点と異なり、第４ｃ層以下でヨシが増加する。第４ｃ層～第８層堆積時は低湿地であったと推定される。

(4)　第８層でイネが検出されているが、量的に少なく周辺部からの流入によるものと思われる。

（二次採取試料）（５～11）

(1)　５地点を除き上層（ａ～ｂ）ではイネが検出される。５地点の上層ではイネが認め

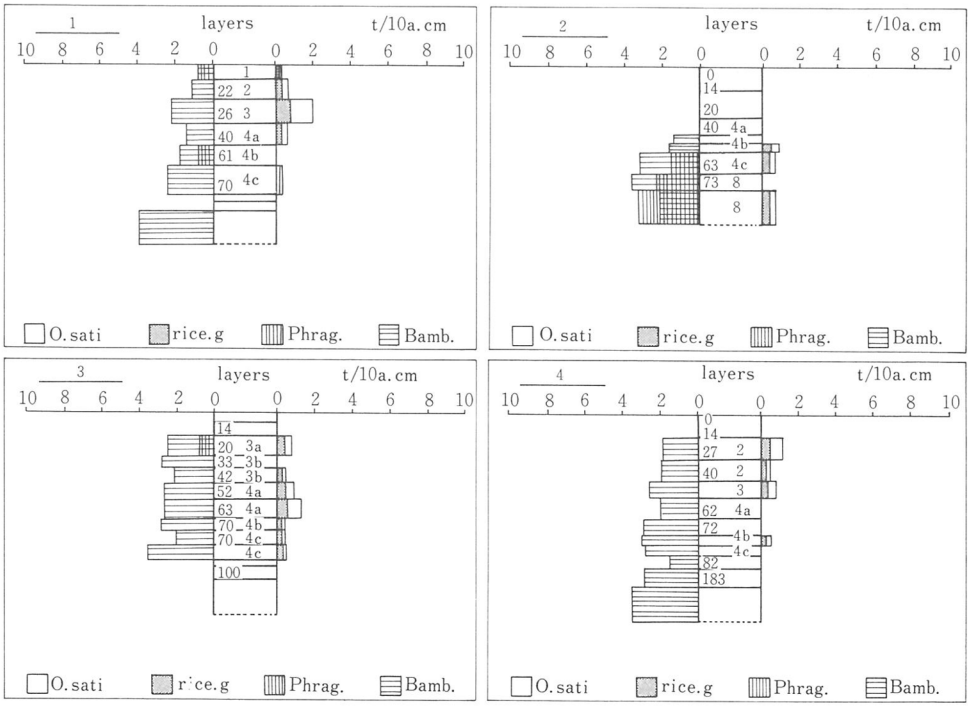
られない。生活遺構が存在したかあるいは盛土などがなされた結果であろう。5地点では下層（d）にイネのピークが認められる。

(2) 11地点を除き、イネの検出量は少なく不安定である。水田が営まれたとしても比較的短期間である。タケ類が多いことを考えると畑の可能性もある。また、採取地点の立地をみると周辺部からの流入も否定できない。

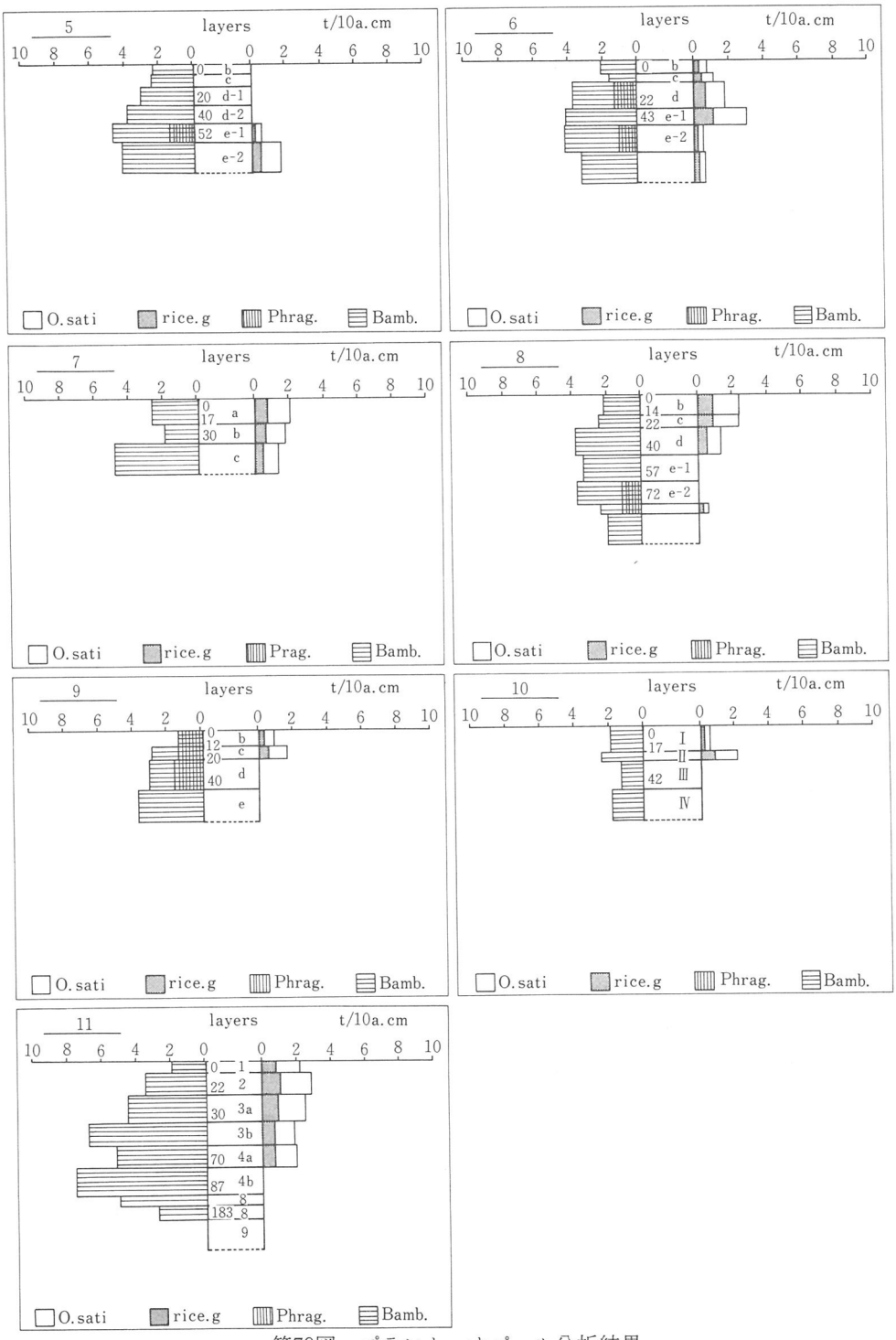
(3) 11地点では、第4a層より上層から安定した状態でイネが出現する。畑作の可能性もあるがイネ・プラント・オパールの密度からみて水田が営まれていた蓋然性が高い。

(4) 11地点の第3b層、第4a層で生産されたイネ籾量は約20 t /10 a である。ただし、この値は収穫が穂刈りで行われたことを前提にしており、かつ両層の堆積期間における生産総量である。当時の平均的年間籾収量を100kg/10 a と仮定すると両層で約200年間稲作が行われていたことになる。

(5) 各地点ともタケ類が卓越している。とくに、11地点は顕著である。樹林帯が海に向かって伸びており、その下床植生としてササ類が繁茂していた結果であろう。二次採取地点ではヌマとされる下層部でもヨシが検出されなかった。おそらくヨシ群落の局地性によるものではないかと思われる。




第78図　プラント・オパール分析結果




第79図　プラント・オパール分析結果

# （III）脇浜遺跡出土木製遺物の用材について

(財)元興寺文化財研究所　松田隆嗣

1．はじめに

脇浜遺跡より出土した木製遺物の大部分は用途不明木製品および杭であり、古墳時代に属する遺物である。

用材としては針葉樹の利用が多いが、遺物の大半が不明木製品であるため、木製品遺物の用途と用材の関連については検討することができなかった。

2．同定方法

樹種の同定は材の内部形態的特徴を光学顕微鏡により観察した結果を基に同定を進めた。

このため、遺物の破損面などからカミソリの刃を用いて木口・柾目・板目面の三方向の切片を作成した。この時できるだけ遺物を傷つけないように注意した。

作成した切片は常法に従いサフラニンで染色後、エチルアルコール、n－ブチルアルコール、キシレンを用い順次脱水し、永久プレパラートに仕上げた。

3．同定理由

同定の結果　針葉樹　5種、広葉樹　3種、樹皮？1点が明らかとなった。

明らかとなった樹種は次の通りである。

針葉樹　　イヌマキ　イヌガヤ　マツ　スギ　ヒノキ

広葉樹　　ナラ類　カシ　シイノキ

その他　　樹皮？

以下に同定理由を述べる。

針葉樹

イヌマキ　*Podocarpus macrophyllus* D.Don　　（マキ科　Podocarpaceae）

材は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行はゆるやかである。樹脂細胞は、ほぼ均等に分布している。分野壁孔はヒノキ型である。

イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* K.Koch *f. drupacea* Kitamura

（イヌガヤ科　Cephalotaxaceae）

材は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行はゆるやかである。樹脂細胞は、ほぼ均等に分布している。分野壁孔はヒノキ型である。仮道管内壁にラセン肥厚を認める。しかし、遺物によっては、材の崩壊が著しく、ラセン肥厚が存在し

ていたのか、あるいは存在していなかったのか正確に判断するのが困難なものもあった。

マツ（二葉松）*Pinus spp.*　（マツ科　Pinaceae）

材は仮道管、放射柔細胞、放射仮道管よりなり、垂直・水平樹脂道を認める。エピセリウム細胞は崩壊・消失している。春材部から夏材部への移行は急激である。分野壁孔は窓状であり、放射仮道管壁に鋸歯状の肥厚を認める。

スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　（スギ科　Taxodiaceae）

材は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行は急激である。樹脂細胞は夏材部に多く存在している。分野壁孔はスギ型である。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc.　（ヒノキ科　Cupressaceae）

材は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞よりなる。春材部から夏材部への移行は比較的ゆるやかである。樹脂細胞は春材部にまばらに存在する。分野壁孔はヒノキ型であるが、崩壊の進んでいるものが多い。

広葉樹

ナラ類　*Quercus spp.*　（ブナ科　Fagaceae）

円形から楕円形の大きな道管が年輪界に沿って配列する（環孔材）。孔圏外で道管は、その径を急に減じるとともにやや角ばった小道管が、単独あるいは数個が接続し放射方向に配列する。穿孔は単穿孔。放射組織は同性で単列放射組織と広放射組織よりなる。

カシ　*Quercus spp.*　（ブナ科　Fagaceae）

楕円形の大きな道管が放射方向に配列する。春材部から夏材部への移行によっても道管径はあまり変化しない。道管はすべて孤立管孔よりなり、その壁の厚さは厚い。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で単列放射組織と広放射組織よりなる。

シイノキ　*Castanopsis cuspidata* Schottky *var. sieboldii* Nakai

（ブナ科　Fagaceae）

楕円形の大きな道管が放射方向３～５列に配列するが、その後、急にその径を減じるとともに不規則に集まる。穿孔は単穿孔。放射組織は同性で単列放射組織のみよりなる。

樹皮？

同定を行った資料は不明木製品（第61図）に差し込まれた状態で存在しており、一部が遺物から出ている状態であった。このため、樹種の同定を実施するのに適切な切片を作成することが不可能であった。

組織は、木口方向と考えられる方向において、年輪状の構成を認めるが、木口面の切片

を作成する方向を正確に合わすことが不可能であり、また、顕微鏡で詳細な観察が可能な厚さの切片を作成することができなかった。柾目面においても、詳細な観察を行うことのできる切片を作成することは困難であったが、年輪と考えられる部分より剥離を生じるとともに、細かな繊維状の組織が木材の繊維方向にのびているのが認められる。

このようなことから資料は樹皮である可能性が高い。

4．結果

出土した木製遺物の大半が不明木製品であるため、遺物の用途と用材の関連を検討することは不可能である。

不明木製遺物の用材として、イヌマキ（2点）、スギ（2点）、ヒノキ（1点）、カシ（1点）、シイノキ（2点）が用いられている。

杭および杭状木製品の用材としては、イヌマキあるいはイヌガヤ（1点）、マツ（1点）、ナラ類（1点）が用いられている。

どちらも、針葉樹の利用が多いが、選択的に針葉樹を利用したものか、手近にあった樹木を用いたのかは不明である。

また、大阪府下の遺跡から発掘される遺物の用材には、イヌマキを用いた木製品をあまり認めないが、和歌山県ではイヌマキを用いた木製遺物がかなり出土しており、脇浜遺跡の位置を考えると、イヌマキを選択的に利用したものか、あるいは手近にあった材を利用したものかは興味深いことと言えよう。

第2表　樹種鑑定結果一覧表

| No. | 図番号 | 遺物 | 時期 | 樹種 | No. | 図番号 | 遺物 | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 第41図1 | 不明木製品 | 古墳時代前期 | スギ | 9 | 第61図 | 不明木製品 | 古墳時代前期 | スギ |
| 2 | 〃 2 | 不明木製品 | 〃 | シイノキ | 10 | 〃 | (ほぞ穴内の木) | 〃 | 樹皮？ |
| 3 | 〃 3 | 不明木製品 | 〃 | イヌマキ | 11 | 〃 | ( 〃 ) | 〃 | 樹皮？ |
| 4 | 〃 4 | 不明木製品 | 〃 | カシ | 12 | | 杭 | 〃 | ナラ類 |
| 5 | 〃 5 | 不明木製品 | 〃 | イヌマキ | 13 | | 杭 | 〃 | イヌガヤ |
| 6 | 第51図1 | 不明木製品 | 〃 | シイノキ | 14 | | 杭 | 〃 | マツ（二葉松） |
| 7 | 〃 4 | 建築部材 | 〃 | スギ | 15 | | 杭状木製品 | 〃 | イヌマキあるいはイヌガヤ |
| 8 | 第60図 | 不明木製品 | 〃 | ヒノキ | | | | | |

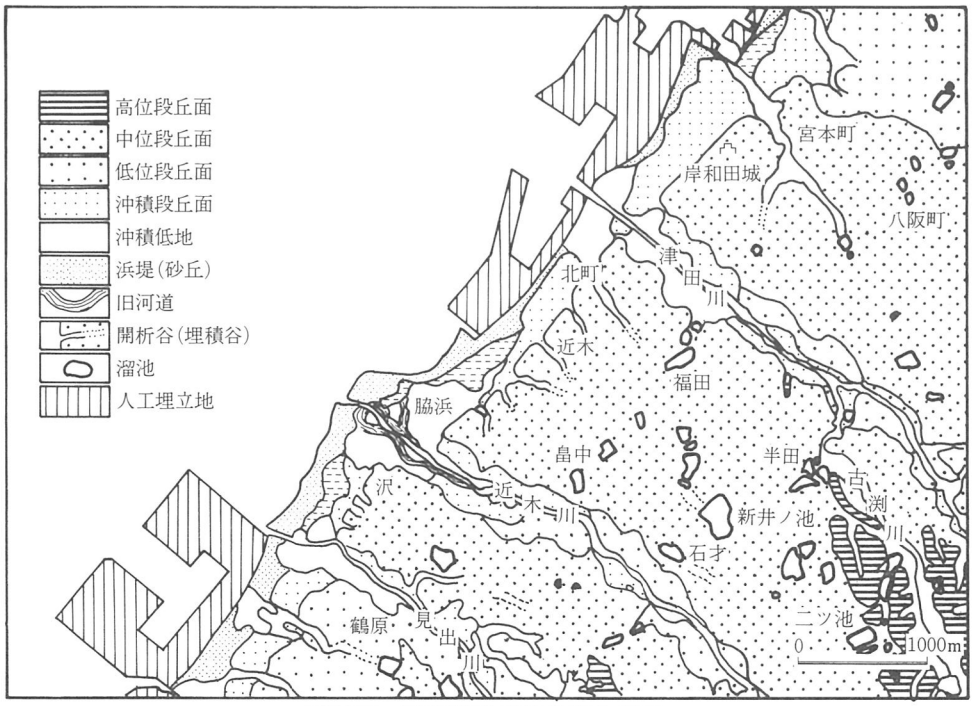
# （Ⅳ）脇浜遺跡の地形環境

大阪府科学教育センター　豊田兼典

泉南地方の平野部では、更新（洪積）世後期に形成された中位段丘面（以下、中位面）の占める割合が高い。この中位面は、海岸線に平行して海抜５～10mに段丘崖を形成し、東部から南部の丘陵地帯にかけて広がり、河川に沿って丘陵内域にまで延びている。約１°弱のきわめて緩傾斜で北西に向け高度を下げている。和泉山脈の主峰部や前衛山地に源を発する津田川、近木川、見出川などの必従河川によって侵食され形成された開析谷には、小規模な低位段丘や沖積段丘が形成されている。

沖積平野は小規模で、段丘崖下に海岸線に平行して幅500m程度のものが続く。三角洲の発達は不充分で、近木川、樫井川、男里川の河口付近に小規模な三角洲が形成されているにすぎない。

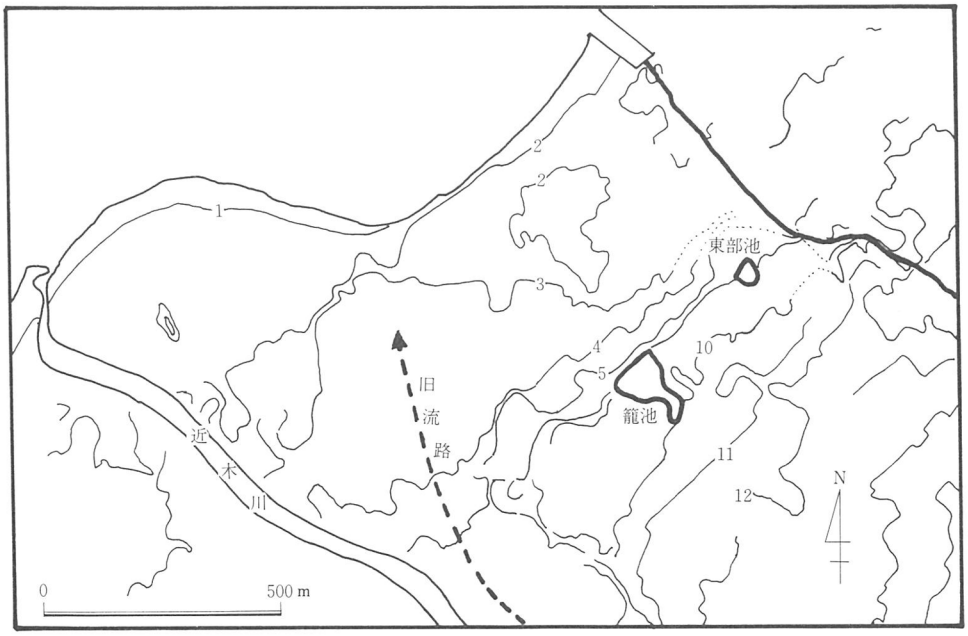
第80図は脇浜遺跡周辺の現地形をもとに、微地形の分類を試みたものである。これによると脇浜遺跡は、北が津田川、南が近木川によって挟まれた中位面（以下、畠中面）の段丘崖下から、海岸沿いの浜堤にかけて広がっている。脇浜遺跡の背後の畠中面は、この地



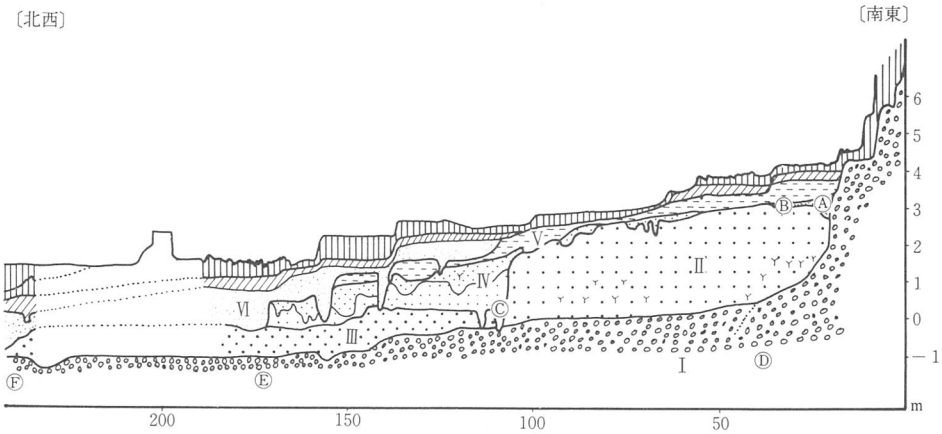

第80図　脇浜遺跡周辺地形分類図

方の中位面と同様に北西に向かって緩やかに高度を下げ、脇浜遺跡の東端となる比高４ｍ強の段丘崖を形成している。この段丘崖から数本の小規模な開析谷が畠中面上を南東方向に延びている。この内数本は、埋積谷となりさらに南東に延びて、この一部が溜池に利用されているものと考えられる。また籠池や東部池のある開析谷の小川は、脇浜遺跡、及びその付近の堆積作用に関与したものと考えられる。

脇浜遺跡が立地する沖積面は、浜堤（一部砂丘）、三角洲、沖積段丘、後背湿地などからなる。浜堤は、浅海の埋立てが行われる以前の海岸線に沿って延びている。海抜２ｍ程度の高まりをもち、小礫を含む粗砂よりなるが、上部や内陸側には中～細砂層よりなるところもある。波の作用によって形成された浜堤の一部が、北西の季節風により飛砂となり移動したものであろう。三角洲は、脇浜遺跡の西方から近木川河口付近一帯にかけて広がる。近木川の下流部は、現在、北西に向かってほぼ直線状に河道が固定されているが、第81図に示したような流路をとっていた時期もあったと推定でき、この河道の分流により脇浜遺跡の西方域の堆積がなされたと考えられる。沖積段丘は、脇浜遺跡の東端付近から北町にかけて、北西にやや傾斜した面をもち、畠中面の段丘崖下に広がる。現地表面の海抜高度は４ｍ前後である。これら浜堤、三角洲、沖積段丘に囲まれて後背湿地がある。海抜２ｍ内外で、脇浜遺跡の調査区中、北西部がこの後背湿地にあたる。




第81図　脇浜遺跡周辺部の等高線図




第82図　脇浜遺跡地層断面図

以上、脇浜遺跡の地形環境を現在の地形面を中心に復原した。以下、大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査資料を基本に古地形の復原を試みる。

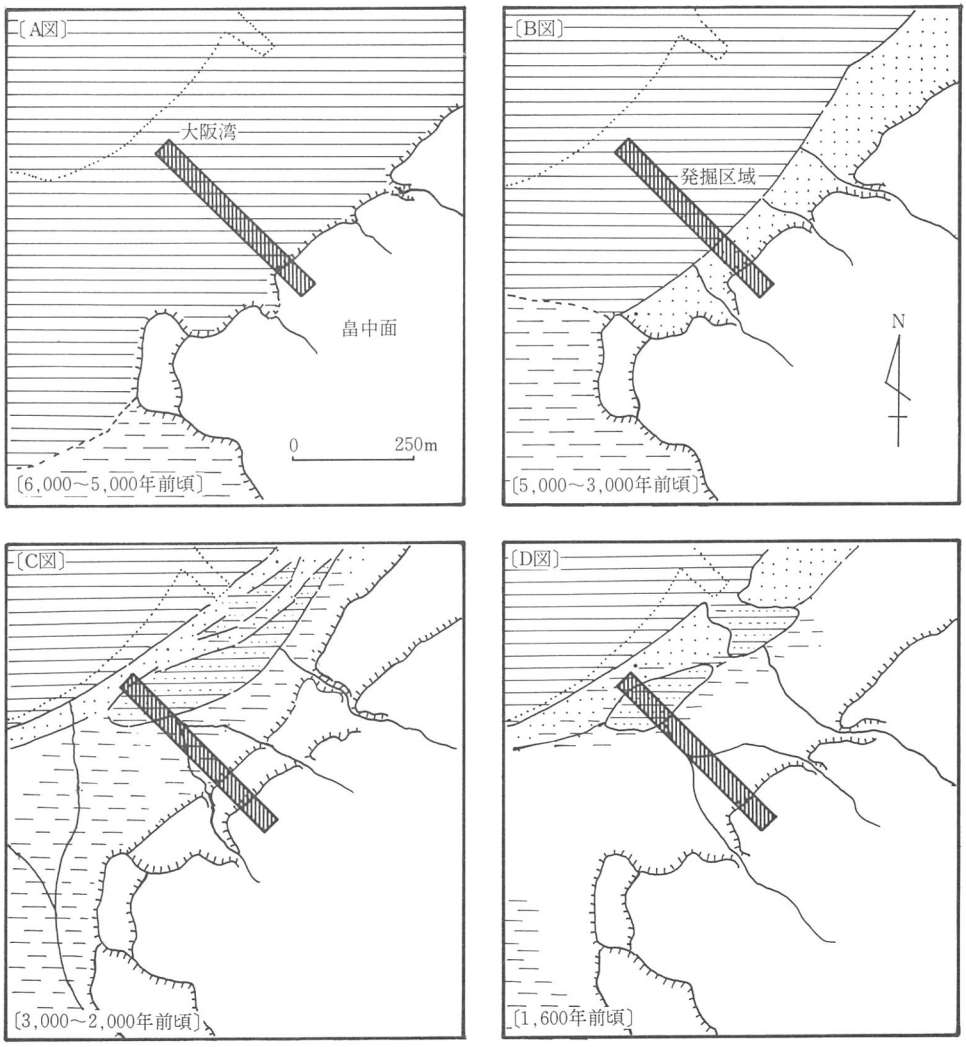
第82図は脇浜遺跡の発掘調査による地層断面図（南東～北西）を簡略化したものである。図中Ⓘの堆積物以外は、いずれの地層も完新世において形成された浜堤、もしくはそれに付随した堆積物である。以下簡単に図中Ⓘ～Ⅵに区分した地層について述べる。なお、Ⅵ層の上層の二層は、現在の耕土（表土層）、もしくはこれに関連した層と考えられる。

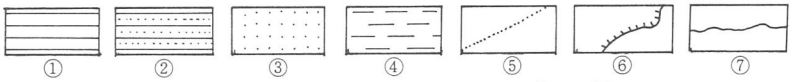
〔Ⅰ層〕　更新世の堆積物。東部の崖面は、海抜約６ｍぐらいより上部が、やや橙色化した和泉砂岩や礫岩で構成され、一部クサリ礫化したものもあり、中位段丘礫層であると考えられる。図中Ⓓ付近より海岸部にかけては、和泉砂岩や礫岩を中心に２～８cm大の亜角礫を主体とした、層厚４ｍ（図中Ⓕ付近）の礫層である。最終氷期以前の堆積層と考えられ、上面は近木川流域の低位段丘面に連続するものと考える。

〔Ⅱ層〕　上面は海抜３ｍ程度で、海岸に向かって傾斜角１°でゆるやかに傾斜している。層厚約３ｍで主として灰色粗砂からなる幅約85ｍの層である。海抜１～２ｍの間に植物遺体を含む層厚５～20cmの黒褐色粘土層を挟み、一時浜堤の発達が休止した時期があったことを示している。この砂層の堆積時期は、この砂層上面の凹地（図中Ⓑ）の黒褐色砂まじり粘土層から縄文晩期の土器片が検出されたことや、これと同じ地層が段丘崖と接するあたりにかにの生痕の跡が残存していたこと、及びこの砂層上面が海抜３ｍ前後にあることなどから考えると、縄文海進の最盛期（6,000～5,000年前）ごろであると考えられる。その後の海退により、縄文時代中期～後期（5,000～4,000年前）ごろには、浜堤を形成していたと考えられる。

〔III層〕　海抜−1 ～ 0 mにかけて堆積している平均層厚 1 mの青灰色粗砂層で、一部に中・小礫を含んでいるが、植物遺体は含まない。上面の海抜高度や上層のIV層との関係からみると、いわゆる「弥生の小海退期（2.300年前ごろ）」に形成された浜堤の一部であると推定される。

〔IV層〕　この砂層は、II層に続きIII層上を覆う平均層厚 1 m前後の砂層で、一部はII層




①海域　②汽水・淡水域　③浜堤　④低湿地　⑤現海岸線　⑥崖　⑦河川

第83図　脇浜遺跡周辺の海岸変遷図

上をも薄く覆っている。上下二層に分類でき、下部層はシルトまじりの黒褐色粗砂（小礫まじり）層、上部層は褐色粗砂層である。下部層からは古墳時代前期の土器が検出（図中Ⓒ）され、古墳時代前期から中期ごろの浜堤であった可能性が高い。上部層はこの層の上に堆積しているⅤ層との関係からして、古墳時代後期の浜堤であろう。

〔Ⅴ層〕　7～15世紀の遺物を含む（黒田技師による）褐灰色の細砂まじり粘土層である。平均層厚40cm程度で、Ⅱ層とⅣ層の上面に堆積している。

〔Ⅵ層〕　海抜－1 m～3 m付近にかけて堆積しているが、現在の地表面の地形に対応して地層面上の高度を下げ、4段からなる。Ⅴ層上に堆積しており、近世以降の堆積層であるといえる。図中Ⓔ地点以西では、この地層の基底が海抜0 m以下となり、上面も1 m程度である。またこの層が黒褐色の粘土まじり砂層であることなどから、堆積時には湿地帯であったことが推定される。

以上の考察をもとに、これに現地形を関連させ脇浜遺跡周辺の沖積面の発達過程を図化したのが第83図である。以下、この図について簡単に解説を加える。

〔A図〕　縄文海進の最盛期（6,000～5,000年前）の推定海岸線を示した。大阪湾における縄文海進最盛期の海水面は、現海面より2～3 m上昇しており、当時、畠中面の段丘崖下まで海が侵入していた。畠中面の段丘崖は、波食崖となっていたと考えられ、崖下にはⅡ層の砂層が堆積していたと推定される。

〔B図〕　縄文海進の最盛期をすぎた縄文後期から晩期（5,000～3,000前ごろ）の推定海岸線である。Ⅱ層が陸化して浜堤が形成された。

〔C図〕　縄文晩期から弥生中期（3,000～2,000年ごろ）の推定海岸線である。いわゆる「弥生の小海退期」の時期で、海岸線はやや後退し、三角洲や浜堤の発達が顕著な時期であった。Ⅲ層が浜堤や後背湿地を形成し、崖下のⅡ層よりなる砂層は段丘化して、Ⅲ層面との間に約1 mの比高をもった高地を形成した。

〔D図〕　古墳時代後期（約1,400年前ごろ）の推定地形である。ほぼ現在に近い地形が形成されていたと考えられる。海岸線に沿って浜堤が延び内側には汽水性の潟湖、もしくは低湿地があり、それに向かって籠池や東部池の開析谷から流れ出る小川が流入していたと推定される。

以上、脇浜遺跡とその周辺部の地形環境、及びその形成について述べてきたが、脇浜遺跡の立地する沖積面の考察は、資料に制約があり、充分とは言えない。今後の課題としたい。

# 図　　版

図版1　脇浜遺跡周辺空中写真

国土地理院　　昭和36年5月30日撮影　　2万分の1

図版2　Ⅱ区72・73—OR

72・73—OR

南東から

72・73—OR

北から

図版3　Ⅱ区72－OR遺物出土状況

土器出土状況　西から

土器出土状況

図版4　Ⅱ区南東段丘・砂堆断面

Ⅱ区山側　　北東から

72－ＯＲ断面　　西から

図版5　Ⅱ区72－OR上面・ピット群

72－OR上面　　南東から

ピット群　　東から

図版6　Ⅱ区足跡・カニ穴

足跡　東から

カニ穴　南から

図版7　Ⅲ区88－OR遺物出土状況

土器出土状況　北西から

土器出土状況　西から

図版8　Ⅲ区88・89－OR遺物出土状況

88－OR
土器出土状況

89－OR　土器出土状況

図版9　Ⅲ区88－OR遺物出土状況

88－OR遺物出土状況
北から

88－OR下層　　木製品出土状況　　東から

図版10　Ⅲ区88－OR遺物出土状況

土器出土状況　西から

土器出土状況　東から